

有 価 証 券 報 告 書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度 自 平成29年4月1日
(第90期) 至 平成30年3月31日

株式会社 **九電工**

福岡市南区那の川一丁目23番35号

電話 福岡 (092) 523-1239
(ダイヤルイン)

(E00146)

第90期(自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)

有価証券報告書

- 1 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 2 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書に添付された監査報告書及び上記の有価証券報告書と併せて提出した内部統制報告書・確認書を末尾に綴じ込んでおります。

株式会社 **九電工**

目 次

頁

第90期 有価証券報告書

【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【沿革】	4
3 【事業の内容】	5
4 【関係会社の状況】	7
5 【従業員の状況】	8
第2 【事業の状況】	9
1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】	9
2 【事業等のリスク】	10
3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	11
4 【経営上の重要な契約等】	18
5 【研究開発活動】	18
第3 【設備の状況】	19
1 【設備投資等の概要】	19
2 【主要な設備の状況】	19
3 【設備の新設、除却等の計画】	21
第4 【提出会社の状況】	22
1 【株式等の状況】	22
2 【自己株式の取得等の状況】	29
3 【配当政策】	30
4 【株価の推移】	30
5 【役員の状況】	31
6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	35
第5 【経理の状況】	45
1 【連結財務諸表等】	46
2 【財務諸表等】	89
第6 【提出会社の株式事務の概要】	106
第7 【提出会社の参考情報】	107
1 【提出会社の親会社等の情報】	107
2 【その他の参考情報】	107
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	108

監査報告書

内部統制報告書

確認書

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 平成30年6月29日

【事業年度】 第90期(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

【会社名】 株式会社九電工

【英訳名】 KYUDENKO CORPORATION

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 西 村 松 次

【本店の所在の場所】 福岡県福岡市南区那の川一丁目23番35号

【電話番号】 福岡(092)523-1239

【事務連絡者氏名】 財務部 経理グループ長 城 戸 圭 一

【最寄りの連絡場所】 東京都豊島区東池袋三丁目1番1号(サンシャイン60)

【電話番号】 東京(03)3980-8611 (代表)

【事務連絡者氏名】 東京本社 総務部長 下 村 晋 二

【縦覧に供する場所】 株式会社九電工東京本社
(東京都豊島区東池袋三丁目1番1号(サンシャイン60))
株式会社九電工関西支店
(大阪府中央区南船場二丁目9番8号(シマノ・住友生命ビル))
株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)
証券会員制法人福岡証券取引所
(福岡市中央区天神二丁目14番2号)

第一部 【企業情報】

第 1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第86期	第87期	第88期	第89期	第90期
決算年月	平成26年 3 月	平成27年 3 月	平成28年 3 月	平成29年 3 月	平成30年 3 月
売上高 (百万円)	279, 310	315, 949	311, 346	341, 771	360, 872
経常利益 (百万円)	8, 908	18, 163	27, 551	32, 187	37, 342
親会社株主に帰属する 当期純利益 (百万円)	3, 681	11, 517	17, 901	22, 297	25, 296
包括利益 (百万円)	4, 175	12, 741	11, 401	24, 086	25, 106
純資産額 (百万円)	94, 438	104, 658	113, 199	141, 503	164, 139
総資産額 (百万円)	225, 727	254, 942	262, 040	300, 478	325, 153
1 株当たり純資産額 (円)	1, 405. 38	1, 555. 33	1, 693. 45	1, 995. 00	2, 269. 48
1 株当たり当期純利益 (円)	51. 95	174. 54	272. 45	327. 22	356. 89
潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益 (円)	—	173. 44	251. 56	313. 47	355. 55
自己資本比率 (%)	41. 1	40. 3	42. 4	46. 6	49. 7
自己資本利益率 (%)	3. 9	11. 9	16. 7	17. 8	16. 8
株価収益率 (倍)	15. 9	7. 5	9. 8	9. 3	14. 7
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	12, 767	19, 117	10, 776	14, 187	29, 903
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△14, 456	△11, 816	△13, 597	△17, 951	△3, 717
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	4, 012	6, 680	△6, 206	7, 200	△21, 783
現金及び現金同等物 の期末残高 (百万円)	21, 668	35, 931	26, 732	30, 027	34, 505
従業員数 (人)	8, 808	8, 891	8, 890	9, 202	9, 752

(注) 1 売上高には、消費税等は含まれていない。

2 平成26年 3 月期の潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載していない。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第86期	第87期	第88期	第89期	第90期
決算年月	平成26年 3 月	平成27年 3 月	平成28年 3 月	平成29年 3 月	平成30年 3 月
売上高 (百万円)	259,868	280,572	281,116	309,796	326,138
経常利益 (百万円)	8,112	16,104	25,350	29,623	33,518
当期純利益 (百万円)	4,255	10,015	16,500	20,815	23,861
資本金 (百万円)	7,901	7,901	7,901	11,632	12,555
発行済株式総数 (千株)	66,039	66,039	66,039	70,134	71,158
純資産額 (百万円)	78,538	88,256	99,946	126,089	147,142
総資産額 (百万円)	200,864	228,387	236,106	274,800	291,886
1株当たり純資産額 (円)	1,189.58	1,337.28	1,522.01	1,797.83	2,067.82
1株当たり配当額 (うち1株当たり 中間配当額) (円)	13.00 (5.00)	25.00 (10.00)	45.00 (20.00)	70.00 (30.00)	90.00 (40.00)
1株当たり当期純利益 (円)	60.04	151.73	251.06	305.39	336.57
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	—	150.78	231.81	292.56	335.30
自己資本比率 (%)	39.1	38.6	42.3	45.9	50.4
自己資本利益率 (%)	5.4	12.1	17.5	18.4	17.5
株価収益率 (倍)	13.8	8.6	10.7	9.9	15.5
配当性向 (%)	21.7	16.5	17.9	22.9	26.7
従業員数 (人)	5,765	5,719	5,725	5,870	6,095

(注) 1 売上高には、消費税等は含まれていない。

2 平成26年3月期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載していない。

3 平成26年3月期の1株当たり配当額13.00円には、特別配当3円を含んでいる。

4 平成27年3月期の1株当たり配当額25.00円には、創立70周年記念配当2円と特別配当7円を含んでいる。

5 平成28年3月期の1株当たり配当額45.00円には、特別配当15円を含んでいる。

6 平成29年3月期の1株当たり配当額70.00円には、特別配当10円を含んでいる。

7 平成30年3月期の1株当たり配当額90.00円には、特別配当10円を含んでいる。

2 【沿革】

年月	摘要
昭和19年12月	電気工事業整備要綱にもとづいて、株式会社営電社ほか九州の主要電気工事業者13社が統合し、資本金250万円をもって九州電気工事株式会社を設立、本社を福岡市に置き、九州各県に支店・営業所を設置、営業開始
昭和20年 2 月	株式会社九州電業社他 3 社を第 2 次統合
昭和20年 3 月	原田電気商会他 3 社を第 3 次統合
昭和20年10月	東京支社(現、東京本社)設置
昭和22年 6 月	九州配電株式会社(現、九州電力株式会社)と配電工事委託契約を締結
昭和28年 7 月	建設工事部門(発電・変電・送電)を分離し、九州電気建設工事株式会社(現、株式会社九建)を設立
昭和29年 6 月	株式会社昭電社を設立(現、株式会社Q-mast・連結子会社)
昭和33年 9 月	貨物自動車運送事業の営業開始
昭和37年 6 月	社員研修所(現、九電工アカデミー)設置
昭和38年 7 月	株式会社大分電設を設立(現、連結子会社)
昭和39年 7 月	空気調和・冷暖房・管工事の営業開始
昭和40年 2 月	大阪支社(現、関西支店)設置
昭和40年 5 月	株式会社小倉電設を設立(現、株式会社きたせつ・連結子会社)
昭和42年10月	株式会社長営電設を設立(現、株式会社チョーエイ・連結子会社)
昭和43年11月	大阪証券取引所市場第二部及び福岡証券取引所市場に上場(資本金 5 億円)
昭和43年11月	株式会社南九州電設を設立(現、連結子会社)
昭和45年 4 月	株式会社有明電設を設立(現、連結子会社)
昭和46年 4 月	株式会社熊栄電設を設立(現、連結子会社)
昭和46年 7 月	水処理工事の営業開始
昭和46年11月	東京証券取引所市場第二部に上場(資本金 8 億 2 千 5 百万円)
昭和46年12月	株式会社明光社の株式取得(現、連結子会社)
昭和47年 2 月	九州電工ホーム株式会社を設立(現、連結子会社)
昭和47年 9 月	東京証券取引所及び大阪証券取引所市場第一部へ指定替え上場(資本金11億円)
昭和48年 6 月	建設業法改正により、建設大臣許可(特—48)第1659号を受けた(現、5 年ごとに更新)
昭和51年 4 月	本社を福岡市南区那の川一丁目23番35号(現在地)に新築移転
昭和56年 8 月	公共下水道工事の営業開始
昭和56年 9 月	株式会社福岡電設を設立(現、連結子会社)
昭和59年10月	九興総合設備株式会社を設立(現、連結子会社)
昭和60年 5 月	合弁会社九連環境開発股份有限公司を設立(現、連結子会社)
昭和62年 3 月	第一回無担保転換社債100億円の発行
昭和63年 7 月	株式会社キューコーリースを設立(現、持分変動に伴い連結除外)
平成元年12月	株式会社九電工に商号変更
平成 9 年12月	本社、福岡支店、福岡支社において I S O 9001 の認証取得(電気、情報通信部門)
平成10年12月	全技術部門において I S O 9001 の認証取得(配電工事部門は、I S O 9002 の認証取得)
平成11年 3 月	技術研究所(現、総合研究開発室)設置
平成11年12月	本社において I S O 14001 の認証取得
平成13年 7 月	全支店において I S O 9001 の認証取得
平成16年 6 月	大阪証券取引所市場第一部の上場廃止
平成17年 4 月	沖縄支社を沖縄支店に改組
平成20年 6 月	貨物自動車運送事業の廃止
平成20年 7 月	東京本社設置
平成24年 1 月	株式会社キューコーリースが連結範囲に含まれないこととなったためリース事業を廃止
平成25年 5 月	シンガポールに所在するASIA PROJECTS ENGINEERING PTE. LTD. の株式の一部を取得(現、連結子会社)
平成27年 3 月	第 2 回無担保転換社債型新株予約権付社債100億円の発行
平成30年 3 月	神奈川県に所在するエルゴテック株式会社の株式の一部を取得(現、連結子会社)

3 【事業の内容】

当社グループは、当社、その他の関係会社1社、子会社58社及び関連会社34社で構成され、設備工事業として、主に配電線工事・屋内配線工事・電気通信工事等の電気工事及び空気調和・冷暖房・給排水衛生設備・水処理工事等の空調管工事の設計・施工を行っている。

また、その他として、電気工事及び空調管工事に関連する材料及び機器の販売事業、不動産販売事業、再生可能エネルギー発電事業、人材派遣事業、ソフト開発事業、環境分析・測定事業、医療関連事業、ゴルフ場経営、ビジネスホテル経営、商業施設の企画・運営等を行っている。

当社グループの事業に係わる位置づけ及びセグメントとの関連は次のとおりである。なお、セグメントと同一の区分である。

また、当連結会計年度より、報告セグメントの管理手法を見直している。詳細は、「第5〔経理の状況〕の1〔連結財務諸表等〕の(1)〔連結財務諸表〕の〔注記事項〕（セグメント情報等）」に記載のとおりである。

〔設備工事業〕

- 当社及び子会社㈱明光社が、その他の関係会社である九州電力㈱より配電線工事を受注施工している。
- 当社が配電線工事以外の電気工事全般及び空調管工事全般を受注施工するほか、工事の一部についてグループ各社へ外注施工として発注している。
- 当社及び子会社㈱クオテックが、設備工事の設計・積算を行っている。
- 子会社㈱設備保守センターが、設備の保守・点検並びにメンテナンスを行っている。
- 子会社KYUDENKO SOUTH EAST ASIA PTE. LTD. が、東南アジアにおける設備工事に関連する事業活動を統括している。

〔その他〕

- 当社及び子会社㈱Q-mastが、電気工事及び空調管工事に関連する材料及び機器の販売事業を行っている。
- 子会社九州電工ホーム㈱が、不動産の販売・賃貸・管理業務を行っている。
- 子会社㈱オートメイション・テクノロジー及び㈱システックが、ソフトウェアの開発事業を行っている。
- 子会社九電工新エネルギー㈱、㈱志布志メガソーラー発電、名取メガソーラー九電工・グリーン企画有限責任事業組合及び㈱鹿児島ソーラーファーム並びに関連会社長崎鹿町風力発電㈱、渥美グリーンパワー㈱、串間ウインドヒル㈱、大分日吉原ソーラー㈱、佐賀相知ソーラー㈱、松島風力㈱、葛尾風力㈱及びソヤノウッドパワー㈱が再生可能エネルギー発電事業を行っている。
- 子会社㈱ポータルが、人材派遣業を行っている。
- 上記のほか、子会社九連環境開発股份有限公司が、空気・水・廃棄物等に含まれる環境負荷の分析サービスを、㈱ネット・メディカルセンターが遠隔画像診断支援サービスを、㈱スリーインがホテル経営を、九電工北山観光㈱がゴルフ場の経営を、㈱ベイサイドブレイス博多が商業施設の企画・運営等を行っている。

※ 平成29年4月1日に、連結子会社である㈱昭電社は、㈱Q-mastに名称を変更している。

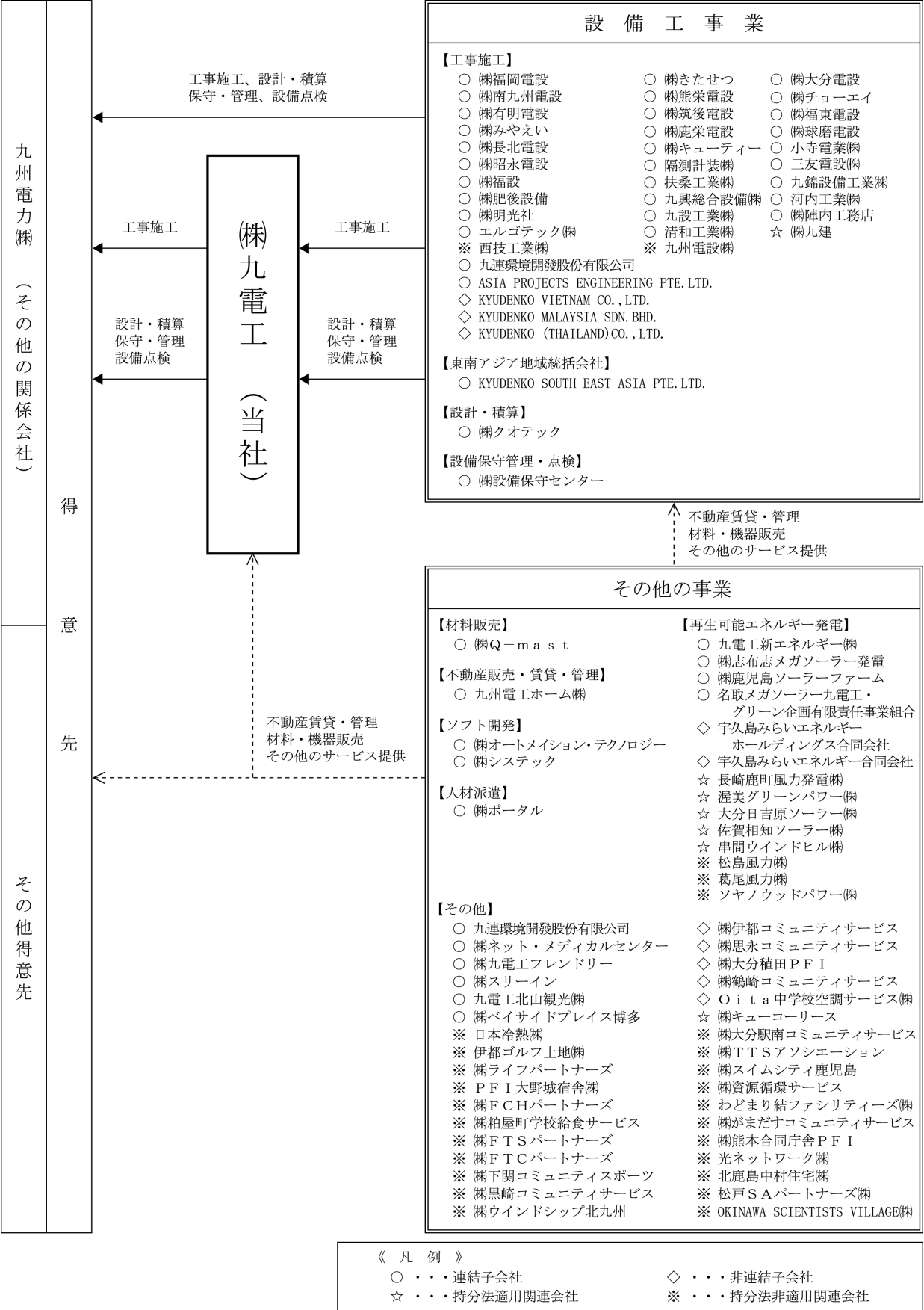
※ 平成29年7月31日に、佐賀県に所在する㈱陣内工務店の株式を取得し、連結子会社としている。

※ 平成30年1月23日に、福島県に所在する三友電設㈱の株式を取得し、連結子会社としている。

※ 平成30年2月14日に、連結子会社である㈱オートメイション・テクノロジーが、鹿児島県に所在する㈱システックの株式を取得し、連結子会社としている。

※ 平成30年3月19日に、神奈川県に所在するエルゴテック㈱の株式の一部を取得し、その子会社の茨城県に所在する清和工業㈱とともに連結子会社としている。

事業の系統図は次のとおりである。



《 凡 例 》

○ . . . 連結子会社

◇ . . . 非連結子会社

☆ . . . 持分法適用関連会社

※ . . . 持分法非適用関連会社

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な 事業の内容	議決権の所有 (又は被所有) 割合(%)	関係内容
(連結子会社)					
(株)福岡電設	福岡県 福岡市 南区	20	設備工事業	100.0 [22.5]	当社の電気工事の外注施工
(株)きたせつ	福岡県 北九州市 小倉北区	20	設備工事業	100.0	当社の電気・空調管工事の外注施工
(株)大分電設	大分県 大分市	20	設備工事業	99.3	当社の電気・空調管工事の外注施工
(株)明光社	宮崎県 宮崎市	21	設備工事業	64.8	当社の電気工事の外注施工
(株)南九州電設	鹿児島県 鹿児島市	20	設備工事業	100.0	当社の電気工事の外注施工
(株)熊栄電設	熊本県 熊本市 南区	20	設備工事業	100.0	当社の電気工事の外注施工
(株)チョーエイ	長崎県 長崎市	20	設備工事業	100.0	当社の電気・空調管工事の外注施工
(株)有明電設	佐賀県 佐賀市	20	設備工事業	100.0	当社の電気・空調管工事の外注施工
九興総合設備(株)	東京都 豊島区	20	設備工事業	100.0	当社の空調管工事の外注施工
エルゴテック(株)	神奈川県 横浜市 西区	92	設備工事業	53.2	当社の空調管工事の外注施工 役員の兼務 1名
九州電工ホーム(株)	福岡県 福岡市 中央区	100	その他	100.0	当社及び連結子会社の損害・生命保険 代理業 当社が資金の貸付を行っている。 役員の兼務 3名
(株)Q-mast	福岡県 福岡市 中央区	300	その他	100.0	当社及び連結子会社に工事用資材及び 機器を販売 役員の兼務 4名
九電工新エネルギー(株)	福岡県 福岡市 中央区	50	その他	100.0	当社が資金の貸付を行っている。 役員の兼務 3名
ASIA PROJECTS ENGINEERING PTE. LTD.	シンガポール 共和国	千シンガポールドル 1,500	設備工事業	82.1 [82.1]	
その他 34社	—	—	—	—	—
(持分法適用関連会社)					
(株)九建	福岡県 福岡市 中央区	100	設備工事業	42.8	当社が同社本社ビルの保守管理を行っ ている。 役員の兼務 1名
その他 6社	—	—	—	—	—
(その他の関係会社)					
九州電力(株) (注) 3	福岡県 福岡市 中央区	237,304	その他	(直接22.5) (間接 0.2)	当社は、同社の配電線工事を委託契約 により施工している。 役員の兼務 2名

(注) 1 主要な事業の内容欄には、セグメント情報に記載された名称を記載している。

2 議決権の所有割合の〔 〕内は、間接所有割合で内数である。

3 有価証券報告書を提出している。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

(平成30年3月31日現在)

セグメントの名称	従業員数(人)
設備工事業	8,610
その他	642
全社(共通)	500
合計	9,752

- (注) 1 従業員数は就業人員である。
2 当社グループ外への出向者(91人)を除いて表示している。

(2) 提出会社の状況

(平成30年3月31日現在)

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
6,095	39.5	17.5	6,623

セグメントの名称	従業員数(人)
設備工事業	5,595
その他	—
全社(共通)	500
合計	6,095

- (注) 1 従業員数は就業人員である。
2 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでいる。
3 社外への出向者(206人)を除いて表示している。

(3) 労働組合の状況

提出会社の労働組合は、九電工労組と称し、昭和21年4月に結成され、平成30年3月31日現在の組合員数は、4,438人であり、上部団体として電力総連に加盟している。また、連結子会社のうち7社については、労働組合が結成されており、平成30年3月31日現在の組合員数は、565人である。

いずれも会社と組合との関係は安定しており、特に記載すべき事項はない。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において、当社グループが判断したものである。

(1) 会社の経営の基本方針

当社グループは、「快適な環境づくりを通して社会に貢献します」を企業理念の柱に掲げ、電気、空調、冷暖房、給排水、情報通信などの設計・施工を営む総合設備業として、社会的使命を果たすと同時に、お客さまや地域社会とともに発展し続ける企業であることを経営の基本としている。

また、これらの事業に関連する環境、エネルギー効率化、リニューアルなどの分野についても、一層の技術開発の促進と品質の向上に努め、お客さまの信頼と期待に応えると同時に、新規分野・新規市場への積極的な事業展開を図ることで、多様化する市場の変化に適宜適切に対応しながら、企業価値の向上をめざしている。

(2) 中長期的な会社の経営戦略

当社グループは、2030年を目処とする将来ビジョン「ありたい姿」の実現に向け、「さらなる飛躍への挑戦」をメインテーマとする中期経営計画（2015年度～2019年度：5カ年計画）を策定している。

本計画は、「九州における安定的な基盤確立」「首都圏事業の強化」「人財の育成」を成長戦略の柱に、「営業力」「技術力」「現場力」「成長力」の一層の強化に当社グループの総力を結集し、より高いステージを目指すものである。

本計画に掲げる重点施策に全力を傾注しつつ、さらに各年度の取り組みの中で顕在化した課題を加え、たとえ経営環境が変化しても熾烈な競争を勝ち抜くためのグループ総合力の向上を進めていく。

〔中期経営計画の概要〕

1. メインテーマ

中期経営計画2019 さらなる飛躍への挑戦 ～新しい成長のステージへ～

2. 重点取り組み施策

○ お客さまの信頼と期待に応える「営業力」の追求

- ・アフターサービス体制の充実
- ・首都圏における経営基盤の強化・拡大
- ・ソリューション営業の拡充
- ・CSR経営の徹底

○ 競争に打ち勝つ「技術力」の進化

- ・徹底した品質の確保とコスト競争力の強化
- ・配電工事部門における採算性向上
- ・エネルギー分野における研究・開発の促進

○ 収益を生み出す「現場力」の向上

- ・施工戦力の充実強化
- ・生産性向上に向けた効率化の推進
- ・関連会社の強化

○ 未来へ飛躍する「成長力」の強化

- ・次世代を担う人財の育成
- ・海外における経営基盤の強化
- ・再生可能エネルギー発電事業の推進
- ・新たな領域での事業開拓

3. 連結数値目標（2020年3月期：中期経営計画最終年度）

売上高	4,000億円
売上総利益率	15.0%以上
営業利益率	9.0%以上
ROE	14.0%以上

(3) 会社の対処すべき課題

今後の経済見通しについては、米中貿易摩擦激化の懸念及び、朝鮮半島情勢の緊迫化など、世界経済は先行き不透明な状況であるが、国内においては企業業績の拡大や雇用・所得環境の改善を下支えとした個人消費の持ち直しなどにより、景気は緩やかな回復が続くものと予想される。

建設業界においては、民間設備投資・公共投資ともに底堅い動きを続けるなど、建設需要は引き続き堅調に推移するものと期待される一方、建設労働者の不足や工事材料費・労務費の上昇など、課題の拡大が予測される。

このような環境認識を踏まえ、当社グループは、中期経営計画（2015年度～2019年度：5カ年計画）の4年目（平成31年3月期）を「飛躍」の年と定め、これまでの3年間の成果を検証・分析し、課題を整理した上で、当社グループ全体でその解決に向け注力していく。

特に、資材コストの一層の低減による受注拡大に向けた競争力の強化や、事業分野と事業エリアの拡大ならびに利益率の更なる向上に総力を結集し、当社グループの収益基盤を強化していく。

また、社員の健康は重要な経営資源であるとの認識に立ち、「働き方改革」に加え、社員の健康管理と健康増進活動を支援する「健康経営」を促進していく。

2 【事業等のリスク】

当社グループの経営成績、財政状況に影響を及ぼす可能性のあるリスクには、主として以下のようなものがある。

文中における将来に関する事項については、当連結会計年度末現在において、当社グループが判断したものである。

当社グループにおいては、これらのリスクの発生の可能性を認識したうえで、発生の回避及び発生した場合の適切かつ迅速な対応に努める所存である。

以下の事項は当社グループが事業を継続するうえで、予想される主なリスクを具体的に例示したものであり、これらに限定されるものではない。

(1) 経済状況等

当社グループの設備工事業は、九州電力株式会社を始めとする国内民間企業及び官公庁などの設備投資の動向に左右されることから、これらの設備投資抑制などは、業績等に影響を及ぼす可能性がある。

(2) 工事材料費及び労務費の変動

工事材料費及び労務費が著しく上昇し、これを請負金額に反映できない場合には、業績等に影響を及ぼす可能性がある。

(3) 貸倒れリスク

当社グループは、取引先別の財務状態に応じた与信設定を行い、信用状態を継続的に把握するなど、不良債権の発生防止に努めているが、取引先の経営・財務状況が悪化した場合、業績等に影響を及ぼす可能性がある。

(4) 保有資産に関するリスク

当社グループは、営業活動に関連して不動産や有価証券等の資産を保有しているが、これら保有資産の時価が著しく低下した場合や、事業用不動産の収益性が著しく低下した場合には、業績等に影響を及ぼす可能性がある。

(5) 設備工事業以外の事業にかかるリスク

当社グループは、中核である設備工事業以外に、不動産販売事業、再生可能エネルギー発電事業、人材派遣事業、ソフト開発事業、環境分析・測定事業、医療関連事業、ゴルフ場経営、ビジネスホテル経営、商業施設の企画・運営事業など、グループの経営資源やネットワークを有効に活用しながら事業領域の拡充を図っている。

これらの事業は、他事業者との競合の進展など事業環境の変化により、業績等に影響を及ぼす可能性がある。

(6) 再生可能エネルギー発電事業にかかるリスク

当該事業は、十分な事前調査及び検討を行ったうえでプロジェクトを採択しており、想定されるリスクについても回避または極小化のための対応を行っているが、通常その事業期間が長期にわたることから、事業環境に著しい変化が生じた場合や、事業遂行上重大な災害・事故等が発生した場合には、業績等に影響を及ぼす可能性がある。

(7) 海外事業に伴うリスク

海外での事業活動では、当該国の政治・経済情勢の変化や法令・規則等に変更があった場合、当社グループの業績等に影響を及ぼす可能性がある。

(8) 退職給付債務

当社グループ退職年金資産の運用結果が前提条件と異なる場合、その数理計算上の差異は、発生の翌事業年度以降一定の期間で費用処理することとしているため、年金資産の運用利回りの悪化や割引率の低下は、業績等に影響を及ぼす可能性がある。

(9) 自然災害の発生

大規模な自然災害の発生に伴い、工事の中断や大幅な遅延、または企業グループの設備が損傷するといった事態が生じた場合、業績等に影響を及ぼす可能性がある。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループ（当社、連結子会社及び持分法適用会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりである。

① 財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度におけるわが国の経済は、不安定な国際情勢に留意する状況が続いたものの、景気は企業収益の改善や個人消費の持ち直しにより、緩やかな回復を続けてきた。

そのような中、建設業界においては、公共投資の底堅い動きに加え、東京オリンピック関連工事や都市再開発工事が進展するなど、建設需要は引き続き堅調に推移した。

このような経営環境のもと当社グループは、中期経営計画の折り返しとなる本年度を、これまでの勢いを更に高める「上昇」の年と位置付け、本計画に定めた営業力・技術力・現場力及び成長力の一層の強化に全力を傾注した。

また、受注確立の向上、アフターサービスの強化・徹底、資材コストをはじめとした工事原価の削減及び、働き方改革の実践など、年度方針に掲げた具体的取り組みを進めてきた。

このような事業運営の結果、当連結会計年度の業績は、以下のとおりとなった。

〔連結業績〕

工事受注高	3,847億57百万円	（前年同期比	1.8%増）
売上高	3,608億72百万円	（前年同期比	5.6%増）
営業利益	347億26百万円	（前年同期比	13.0%増）
経常利益	373億42百万円	（前年同期比	16.0%増）
親会社株主に帰属する当期純利益	252億96百万円	（前年同期比	13.4%増）

セグメントごとの経営成績は、次のとおりである。

なお、当連結会計年度より、報告セグメントの管理手法を見直しており、前連結会計年度との比較・分析は変更後の区分に基づいて記載している。

（設備工事業）

売上高の状況は、期首の手持工事が順調に進捗したことなどから、前連結会計年度と比べ174億87百万円増加（5.3%増）し、3,464億3百万円となった。

また、セグメント利益（営業利益）についても、売上高の増加に伴い、前連結会計年度と比べ40億24百万円増加し、332億73百万円となった。

（その他）

売上高の状況は、工事に関連する材料並びに機器の販売事業などが増加したことなどから、前連結会計年度と比べ16億13百万円増加（12.5%増）し、144億68百万円となった。

また、セグメント利益（営業利益）についても、工事に関連する材料並びに機器の販売事業などの売上高の増加に伴い、前連結会計年度と比べ4億11百万円増加し、17億35百万円となった。

財政状態は、次のとおりである。

(資産の部)

資産合計は、受取手形・完成工事未収入金等の増加などにより、前連結会計年度と比べ246億74百万円増加し、3,251億53百万円となった。

(負債の部)

負債合計は、支払手形・工事未払金等の増加などにより、前連結会計年度と比べ20億38百万円増加し、1,610億14百万円となった。

(純資産の部)

純資産合計は、親会社株主に帰属する当期純利益の計上などにより、前連結会計年度末と比べ226億35百万円増加し、1,641億39百万円となった。

② キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、前連結会計年度末に比べ44億77百万円増加し、345億5百万円となった。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果増加した資金は、299億3百万円（前連結会計年度比157億15百万円の収入額の増加）となった。これは、主に未払消費税の増加及び未収消費税の減少によるものである。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動の結果支出した資金は、37億17百万円（前連結会計年度比142億33百万円の支出額の減少）となった。これは、主に投資有価証券の取得による支出の減少によるものである。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動の結果支出した資金は、217億83百万円（前連結会計年度比289億83百万円の支出額の増加）となった。これは、主に短期借入金が増加したことによるものである。

③ 生産、受注及び販売の実績

(a) 受注実績

セグメントの名称	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
	金額(百万円)	金額(百万円)
設備工事業	377,769	384,757 (1.8%増)
その他	—	— (—)
合計	377,769	384,757 (1.8%増)

(b) 売上実績

セグメントの名称	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
	金額(百万円)	金額(百万円)
設備工事業	328,915	346,403 (5.3%増)
その他	12,855	14,468 (12.5%増)
合計	341,771	360,872 (5.6%増)

総売上実績に対する割合が100分の10以上の相手先別の売上実績及びその割合は、次のとおりである。

相手先	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
	金額(百万円)	割合(%)	金額(百万円)	割合(%)
九州電力(株)	52,505	15.4	51,910	14.4

(c) 次期繰越工事高

セグメントの名称	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
	金額(百万円)	金額(百万円)
設備工事業	278,580	331,590 (19.0%増)
その他	—	— (—)
合計	278,580	331,590 (19.0%増)

- (注) 1 セグメント間の取引については相殺消去している。
2 当連結企業集団では設備工事業以外は受注生産を行っていない。
3 当連結企業集団では生産実績を定義することが困難であるため「生産の状況」は記載していない。
4 本表の金額には、消費税等は含まれていない。

なお、参考のため提出会社個別の事業の状況は次のとおりである。

設備工事業における受注工事高及び完成工事高の状況

(注) 従来、「配電線工事」に含めていた通信関連工事を当事業年度より、「屋内線工事」に含んでいる。その為、前事業年度「配電線工事」に含めていた通信関連工事を「屋内線工事」に組替えて表示している。

○ 受注工事高、完成工事高及び次期繰越工事高

期別	工事種別	前期繰越工事高 (百万円)	当期受注工事高 (百万円)	計 (百万円)	当期完成工事高 (百万円)	次期繰越工事高 (百万円)
前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	配電線工事	335	46,291	46,627	45,620	1,006
	屋内線工事	165,009	211,180	376,189	174,021	202,168
	空調管工事	56,698	96,589	153,288	88,881	64,406
	計	222,044	354,061	576,105	308,523	267,582
当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	配電線工事	1,006	44,711	45,717	45,029	688
	屋内線工事	202,168	206,257	408,425	184,047	224,378
	空調管工事	64,406	109,013	173,420	95,746	77,673
	計	267,582	359,982	627,564	324,823	302,740

(注) 1 前事業年度以前に受注した工事で、契約の変更により請負金額の増減がある場合は、当期受注工事高にその増減額を含む。したがって、当期完成工事高にもかかる増減額が含まれる。

2 次期繰越工事高は(前期繰越工事高+当期受注工事高-当期完成工事高)である。

○ 受注工事高の受注方法別比率

工事の受注方法は、特命と競争並びに九州電力株式会社との委託契約によるものとに大別される。

期別	区分	特命(%)	競争(%)	委託契約(%)	計(%)
前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	配電線工事	3.3	5.5	91.2	100
	屋内線工事	71.3	28.7	—	100
	空調管工事	72.2	27.8	—	100
当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	配電線工事	3.1	4.9	92.0	100
	屋内線工事	76.2	23.8	—	100
	空調管工事	60.8	39.2	—	100

(注) 百分比は請負金額比である。

○ 完成工事高

期別	区分	官公庁 (百万円)	民間(百万円)			合計 (百万円)
			九州電力㈱	一般民間会社	計	
前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	配電線工事	46	44,738	835	45,574	45,620
	屋内線工事	15,981	1,369	156,669	158,039	174,021
	空調管工事	9,247	1,391	78,242	79,633	88,881
	計	25,274	47,500	235,748	283,248	308,523
当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	配電線工事	73	44,310	645	44,955	45,029
	屋内線工事	21,187	1,497	161,361	162,859	184,047
	空調管工事	7,708	960	87,077	88,037	95,746
	計	28,970	46,768	249,084	295,852	324,823

(注) 1 完成工事のうち主なものは、次のとおりである。

前事業年度 請負金額 10億円以上の主なもの

Kクリーンエネルギー奈良㈱	(仮称) 天理市ソーラーパーク 1 号発電所工事
清水建設㈱	埼玉県立小児医療センター新病院新築工事
合同会社ソーラーファーム松橋	(仮称) 熊本県宇城市松橋町太陽光発電所
一般財団法人BOATRACE振興会	ボートレース下関ナイター照明設備設置工事
学校法人近畿大学	東大阪キャンパス整備 I 期工事

当事業年度 請負金額 10億円以上の主なもの

合同会社レナトス相馬ソーラーパーク	相馬市磯辺地区太陽光発電所建設工事
鹿児島湧水ソーラーパーク合同会社	ソフトバンク鹿児島湧水ソーラーパーク建設工事
佐賀相知ソーラー㈱	佐賀相知太陽光発電所建設工事
㈱ケン・コーポレーション	K E N 里美太陽光発電所建設工事
㈱福田組	イーアス高尾ショッピングセンター新築工事

2 完成工事高総額に対する割合が100分の10以上の相手先別の完成工事高及びその割合は、次のとおりである。

前事業年度		
九州電力㈱	47,500百万円	15.4%
当事業年度		
九州電力㈱	46,768百万円	14.4%

○ 次期繰越工事高(平成30年3月31日現在)

区分	官公庁 (百万円)	民間(百万円)			合計 (百万円)
		九州電力㈱	一般民間会社	計	
配電線工事	—	496	191	688	688
屋内線工事	14,627	328	209,421	209,750	224,378
空調管工事	4,857	197	72,617	72,815	77,673
計	19,485	1,023	282,231	283,255	302,740

次期繰越工事のうち請負金額 10億円以上の主なものは、次のとおりである。

串間ウインドヒル㈱	串間風力発電所建設工事	平成32年9月完成予定
三井住友ファイナンス&リース㈱	延岡門川メガソーラーパーク建設工事	平成32年6月完成予定
清水建設㈱	福岡空港国内線旅客ターミナルビル再整備工事	平成31年3月完成予定
合同会社ソーラーファーム南さつま	ソーラーファーム南さつま発電所建設工事	平成31年10月完成予定
東京センチュリー㈱	福島・田人メガソーラー発電所建設工事	平成31年9月完成予定

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりである。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものである。

① 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている企業会計の基準に準拠して作成されている。この連結財務諸表作成に際し、当社グループ経営陣は、決算日における資産・負債の数値、並びに報告期間における収益・費用の報告数値に影響を与える様々な要因・仮定に対し、継続して可能な限り正確な見積りと適正な評価を行っている。

なお、見積り、判断及び評価は、過去の実績や状況に応じて合理的と考えられる要因等に基づき行っているが、見積り特有の不確実性があるため、実際の結果は異なる可能性がある。

② 当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

(a) 当社グループの当連結会計年度の経営成績等について

・財政状態

(資産の部)

流動資産は、受取手形・完成工事未収入金等の増加などにより、前連結会計年度末と比べ244億68百万円増加し、1,826億40百万円となった。

固定資産は、投資有価証券の増加などにより、前連結会計年度末と比べ2億6百万円増加し、1,425億13百万円となった。

これらの結果、資産合計は前連結会計年度末と比べ246億74百万円増加し、3,251億53百万円となった。

(負債の部)

流動負債は、支払手形・工事未払金等の増加などにより、前連結会計年度末と比べ54億81百万円増加し、1,302億26百万円となった。

固定負債は、新株予約権の権利行使による転換社債型新株予約権付社債の減少などにより、前連結会計年度末と比べ34億42百万円減少し、307億87百万円となった。

これらの結果、負債合計は前連結会計年度末と比べ20億38百万円増加し、1,610億14百万円となった。

(純資産の部)

純資産合計は、親会社株主に帰属する当期純利益の計上などにより、前連結会計年度末と比べ226億35百万円増加し、1,641億39百万円となった。

・経営成績

(売上高)

売上高は、期首の手持工事が順調に進捗したことなどから、前連結会計年度と比べ191億0百万円（前年同期比5.6%）増加の3,608億72百万円となった。

(営業利益)

営業利益は、売上高の増加に伴い、前連結会計年度と比べ39億94百万円（前年同期比13.0%）増加の347億26百万円となった。

(経常利益)

経常利益は、営業利益の増加により、前連結会計年度と比べ51億54百万円（前年同期比16.0%）増加の373億42百万円となった。

(親会社株主に帰属する当期純利益)

親会社株主に帰属する当期純利益は、営業利益の増加により、前連結会計年度と比べ29億98百万円（前年同期比13.4%）増加の252億96百万円となった

・キャッシュ・フロー

当連結会計年度における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、前連結会計年度末と比べ44億77百万円増加し、345億5百万円となった。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動の結果増加した資金は、299億3百万円（前連結会計年度比157億15百万円の収入額の増加）と

なった。

これは、主に未払消費税の増加及び未収消費税の減少によるものである。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動の結果支出した資金は、37億17百万円（前連結会計年度比142億33百万円の支出額の減少）となった。

これは、主に投資有価証券の取得による支出の減少によるものである。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動の結果支出した資金は、217億83百万円（前連結会計年度比289億83百万円の支出額の増加）となった。

これは、主に短期借入金が減少したことによるものである。

また、重要な資本的支出の予定及びその資金の調達源等については、「第3〔設備の状況〕の3〔設備の新設、除却等の計画〕の(1)重要な設備の新設等」に記載のとおりである。

(b) 当社グループの経営成績に重要な影響を与える要因について

当社グループの経営成績に重要な影響を与える要因については、「第2〔事業の状況〕の1〔経営方針、経営環境及び対処すべき課題等〕、2〔事業等のリスク〕及び3〔経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析〕の(2)経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容の①重要な会計方針及び見積り」に記載のとおりである。

(c) 当社グループの資本の財源及び資金の流動性について

当社グループの資本の財源及び資金の流動性については、「(a) 当社グループの当連結会計年度の経営成績等について」に記載のとおりである。

(d) セグメントごとの財政状態及び経営成績の状況に関する認識及び分析・検討内容について

セグメントごとの財政状態については、事業セグメントに資産及び負債を配分していないため、セグメントごとの財政状態の状況に関する記載は行わない。また、セグメントごとの経営成績の状況については、「第2〔事業の状況〕の3〔経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析〕の(1)経営成績等の状況の概要」に記載のとおりである。

4 【経営上の重要な契約等】

該当事項なし。

5 【研究開発活動】

(設備工事業)

当社グループにおける研究開発活動は、主に「総合研究開発室」を拠点とし、先進的な技術や手法等を導入展開していく役割や現場での技術的問題解決の知識と機能を保持する業務に取り組んでいる。

なお、当連結会計年度における研究開発費は286百万円であり、当連結会計年度の主な研究開発成果は次のとおりである。

① 配電技術分野

配電技術分野では、九州電力配電線設備における建設・保守作業を、より「安全」、「高品質」且つ「効率的」に行うための車両・機械・工具の改良、開発、並びに工法の改善を行っている。

なお、配電技術グループにおける研究開発費は42百万円である。

② 電気技術分野

電気技術分野では、ドローンを利用した太陽光発電所における太陽光モジュールの不具合検知について、A I（人工知能）を利用して多数の撮影画像から不具合画像を自動抽出させる研究を九州大学と開始した。また、今後住宅向けリチウムイオン蓄電池の普及が見込まれることを背景にこれらをネットワークで有機的に接続し、あたかもひとつの大きな蓄電池と見立てるバーチャルパワープラント技術について、九州工業大学へ受託研究を開始している。

その他、当社における働き方改革の実験的取り組みとして、モバイル端末を活用したコミュニケーションツールの試用やb o t（ボット：人工会話プログラム）による資材発注システムの試用などを行なっている。

なお、電気技術グループにおける研究開発費は107百万円である。

③ 空調管技術分野

空調管技術分野では、従来の気流・温度シミュレーションに加え、新たな取り組みとして構造解析シミュレーションの研究と運用を実施しており、機器鉄骨架台等の検討における品質保証だけでなく、V E提案ができる技術支援として活用している。また、熱音響エンジンの開発を北九州高専と共同研究を行なった。

なお、空調管技術グループにおける研究開発費は137百万円である。

子会社における研究開発活動は特段行われていない。

(その他)

研究開発活動は特段行われていない。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

(設備工事業)

当連結会計年度は、作業環境の整備並びに安全面及び作業能率の向上を目的として、事業所の更新や工事用機器の購入を中心に投資を行い、その総額は17億95百万円であった。

なお、設備の売却・撤去等については、特に記載すべき事項はない。

(その他)

当連結会計年度は、再生可能エネルギー発電事業における太陽光発電設備への投資等を行い、その総額は24億49百万円であった。

なお、設備の売却・撤去等については、特に記載すべき事項はない。

(注) 1 上記の投資総額には無形固定資産及び長期前払費用への投資額を含めて表示している。

2 「第3 設備の状況」における各事項の記載については、消費税等抜きの金額で表示している。

2 【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

(平成30年3月31日現在)

事業所名 (所在地)	帳簿価額(百万円)						従業員数 (人)
	建物 構築物	機械・運搬具 工具器具備品	土地		リース資産	合計	
			面積(㎡)	金額			
本社 (福岡県福岡市南区) (注3) (注4)	5,463	597	68,926 (13)	3,062	92	9,215	714
東京本社 (東京都豊島区) (注3)	209	21	2,985 (365)	46	51	328	578
福岡支店 (福岡県福岡市南区) (注3) (注4)	3,829	178	95,594 (3,927)	4,077	372	8,458	1,068
北九州支店 (福岡県北九州市小倉北区) (注3) (注4)	1,143	99	50,652 (2,050)	2,000	238	3,481	537
大分支店 (大分県大分市) (注3) (注4)	1,037	110	49,800 (7,835)	1,319	287	2,754	507
宮崎支店 (宮崎県宮崎市) (注3) (注4)	1,821	582	44,205 (122,975)	993	213	3,611	403
鹿児島支店 (鹿児島県鹿児島市) (注3) (注4)	1,279	147	90,004 (4,247)	2,751	324	4,503	609
熊本支店 (熊本県熊本市中央区) (注3) (注4)	2,492	135	64,062 (2,141)	3,011	339	5,978	665
長崎支店 (長崎県長崎市) (注3) (注4)	1,700	134	39,656 (440)	2,351	303	4,490	463
佐賀支店 (佐賀県佐賀市) (注3)	562	2,571	48,466 (289,403)	677	164	3,977	327
関西支店 (大阪府大阪市中央区)	4	1	—	—	5	11	115
沖縄支店 (沖縄県豊見城市) (注4)	409	3	3,979	192	5	610	109

(2) 国内子会社

(平成30年3月31日現在)

(平成30年3月31日現在)

会社名 (所在地)	セグメントの 名称	帳簿価額(百万円)						従業員数 (人)
		建物 構築物	機械・運搬具 工具器具備品	土地		リース資産	合計	
				面積(㎡)	金額			
㈱福岡電設 (福岡県福岡市南区)	設備工事業	47	22	—	—	23	92	112
㈱きたせつ (福岡県北九州市 小倉北区)	設備工事業	169	7	3,316 (5,907)	280	37	495	151
㈱大分電設 (大分県大分市)	設備工事業	69	5	3,001	198	69	343	155
㈱明光社 (宮崎県宮崎市)	設備工事業	269	283	35,782 (883)	423	57	1,034	193
㈱南九州電設 (鹿児島県鹿児島市)	設備工事業	161	8	8,262	326	41	537	117
㈱熊栄電設 (熊本県熊本市南区)	設備工事業	63	0	3,158	405	22	491	140
㈱チョーエイ (長崎県長崎市)	設備工事業	88	0	1,270 (153)	120	39	248	164
㈱有明電設 (佐賀県佐賀市)	設備工事業	111	1	3,043	97	29	240	124
九州電工ホーム㈱ (福岡県福岡市中央区)	その他	1,339	5	37,078 (11)	487	2	1,835	43
㈱Q-mast (福岡県福岡市中央区)	その他	187	19	2,110	272	23	502	116
九電工新エネルギー㈱ (福岡県福岡市中央区)	その他	862	13,600	4,657	18	—	14,481	16

(3) 在外子会社

(平成30年3月31日現在)

(平成30年3月31日現在)

会社名 (所在地)	セグメントの 名称	帳簿価額(百万円)					従業員数 (人)	
		建物 構築物	機械・運搬具 工具器具備品	土地		リース資産		合計
				面積(㎡)	金額			
九連環境開発股份有限公司 (台湾国桃園市)	その他	172	104	2,021	214	23	515	169
ASIA PROJECTS ENGINEERING PTE. LTD. (シンガポール共和国)	設備工事業	584	79	—	—	—	663	523

(注) 1 帳簿価額に建設仮勘定は含まない。

2 提出会社は設備工事業の他に関連機器の材料販売等を営んでいるが、大半の設備は設備工事業に使用しているため、セグメントに分類せず、主要な事業所ごとに一括して記載している。

3 土地及び建物の一部を連結会社以外から賃借している。年間賃借料は613百万円であり、土地の面積については、()内に外書きで示している。

4 連結会社以外へ賃貸中のものを含んでおり、その内訳は次のとおりである。

(提出会社)

事業所	土地		建物
	面積(㎡)	帳簿価額(百万円)	帳簿価額(百万円)
本社	5,054	89	140
福岡支店	3,003	497	62
北九州支店	2,788	105	—
大分支店	3,227	37	3
宮崎支店	1,646	4	3
鹿児島支店	10,774	858	10
熊本支店	782	3	7
長崎支店	1,776	68	66
沖縄支店	—	—	1

(国内子会社)

会社名	土地		建物
	面積(㎡)	帳簿価額(百万円)	帳簿価額(百万円)
(株)きたせつ	117	1	1
(株)大分電設	849	5	28
(株)明光社	1,290	17	—
(株)南九州電設	2,475	287	—
(株)熊栄電設	1,092	97	28
(株)チャーエイ	—	—	5
九州電工ホーム(株)	28,543	617	369
(株)Q-mast	260	12	37

3 【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設等

セグメント の名称	会社名	投資予定額 (百万円)		資金調達方法	設備の内容等	着工年	完成予定年	完成後の 増加能力
		総額	既支払額					
設備工事業	(株)九電工	890	49	自己資金	大分支店 建物（建替）	平成30年	平成31年	—
設備工事業	(株)九電工	1,430	8	自己資金	別府保養所 建物（建替）	平成30年	平成31年	—

(2) 重要な設備の除却等

重要な設備の除却等の計画はない。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	250,000,000
計	250,000,000

② 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (平成30年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (平成30年6月29日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	71,158,510	71,158,510	東京証券取引所 (市場第一部) 福岡証券取引所	単元株式数は100株である。
計	71,158,510	71,158,510	—	—

(注) 提出日現在発行数には、平成30年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの新株予約権の権利行使により発行された株式数は、含まれていない。

(2) 【新株予約権等の状況】

① 【ストックオプション制度の内容】

該当事項なし。

② 【ライツプランの内容】

該当事項なし。

③ 【その他の新株予約権等の状況】

会社法に基づき発行した転換社債型新株予約権付社債は次のとおりである。

第2回無担保転換社債型新株予約権付社債(平成27年2月26日取締役会決議)		
	事業年度末現在 (平成30年3月31日)	提出日の前月末現在 (平成30年5月31日)
新株予約権の数(個)	13 (注) 1	13 (注) 1
新株予約権のうち自己新株予約権の数(個)	—	同左
新株予約権の目的となる株式の種類	普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数(株)	7,216 (注) 2	7,273 (注) 2
新株予約権の行使時の払込金額(円)	1,801.50(注) 3 (注) 4	1,787.40(注) 3 (注) 4
新株予約権の行使期間	平成27年4月1日～平成31年3月13日	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円) (注) 5	発行価格 1,801.50 資本組入額 901	発行価格 1,787.40 資本組入額 894
新株予約権の行使の条件	当社が新株予約権付社債を買入れ新株予約権付社債の社債部分を消却した場合には、当該新株予約権付社債に付された新株予約権を行使することはできない。また、各新株予約権の一部について新株予約権を行使することはできないものとする。	
新株予約権の譲渡に関する事項	新株予約権付社債の社債部分と新株予約権のうち一方のみを譲渡することはできない。	

新株予約権の行使の際に出資の目的とする財産の内容及び価格	各新株予約権の行使に際しては、当該各新株予約権にかかる各新株予約権付社債の社債部分を出資するものとする。各新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、各新株予約権付社債の払込金額と同額とする。	同左
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	(注) 6	同左
新株予約権付社債の残高(百万円)	13(注) 1	13(注) 1

(注) 1 新株予約権付社債の額面 1 百万円につき新株予約権 1 個が割り当てられている。

2 同一の新株予約権者により同時に行使された新株予約権にかかる新株予約権付社債の金額の総額を当該行使の効力発生日において適用のある転換価額で除して得られる数とする。この場合に 1 株未満の端数を生ずる場合は、これを切り捨て、現金による調整は行わない。

3 新株予約権の行使時の払込金額

各新株予約権の行使に際しては、当該各新株予約権にかかる各新株予約権付社債の社債部分を出資するものとし、各新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、各新株予約権付社債の払込金額と同額とする。なお、転換価額については当事業年度末現在は 1,801.50 円、平成 30 年 5 月 31 日末現在は 1,787.40 円である。

4 転換価額の調整

①新株予約権付社債の発行後、本 4 ②に掲げる事由により当社の普通株式数に変更を生じる場合または変更を生じる可能性がある場合は、次に定める算式（「新株発行等による転換価額調整式」という）をもって転換価額を調整する。

$$\text{調整後転換価額} = \text{調整前転換価額} \times \frac{\text{既発行株式数} + \frac{\text{交付株式数} \times 1 \text{株当たりの払込金額}}{\text{時価}}}{\text{既発行株式数} + \text{交付株式数}}$$

②新株発行等による転換価額調整式により転換価額の調整を行う場合およびその調整後の転換価額の適用時期については、次に定めるところによる。

(a) 時価（本（h）に定義する。以下同じ。）を下回る払込金額をもって当社普通株式を引き受ける者の募集をする場合。

調整後の転換価額は、払込期日または払込期間の末日の翌日以降、また、当該募集において株主に株式の割当てを受ける権利を与える場合は、当該権利を与える株主を定めるための基準日の翌日以降、これを適用する。

(b) 当社普通株式の株式分割または当社普通株式の無償割当て等をする場合。

調整後の転換価額は、当該株式分割または無償割当て等により株式を取得する株主を定めるための基準日（基準日を定めない場合は、その効力発生日）の翌日以降、これを適用する。

(c) 時価を下回る価額をもって当社普通株式の交付と引換えに取得される証券（権利）もしくは取得させることができる証券（権利）または当社普通株式の交付を受けることができる新株予約権の交付と引換えに取得される証券（権利）もしくは取得させることができる証券（権利）、または行使することにより当社普通株式の交付を受けることができる新株予約権（新株予約権付社債に付されたものを含む。）を発行する場合。なお、新株予約権無償割当ての場合（新株予約権付社債を無償で割り当てる場合を含む、以下同じ。）は、新株予約権を無償として当該新株予約権を発行したものとして本（c）を適用する。

調整後の転換価額は、発行される証券（権利）または新株予約権（新株予約権の交付と引換えに取得される証券（権利）もしくは取得させることができる証券（権利）に関して交付の対象となる新株予約権を含む。）の全てが当初の転換価額で取得されまたは当初の転換価額で行使されたものとみなして新株発行等による転換価額調整式を準用して算出するものとし、当該証券（権利）または新株予約権の払込期日または払込期間の末日の翌日以降、また、当該募集において株主に割当てを受ける権利を与える場合は、当該権利を与える株主を定めるための基準日（基準日を定めない場合は、その効力発生日）の翌日以降これを適用する。ただし、本（c）に定める証券（権利）または新株予約権の発行（新株予約権無償割当ての場合を含む。）が当社に対する企業買収の防衛を目的とする発行である旨を、当社が公表のうえ社債管理者に通知したときは、調整後の転換価額は、当該証券（権利）または新株予約権（新株予約権の交付と引換えに取得される証券（権利）もしくは取得させることができる証券（権利）については、交付の対象となる新株予約権を含む。）について、当該証券（権利）または新株予約権の要項上、当社普通株式の交付と引換えにする取得の請求もしくは取得条項にもとづく取得もしくは当該証券（権利）もしくは新株予約権の行使が可能となった日（以下「転換・行使開始日」という。）の翌日以降、転換・行使開始日において取得の請求、取得条項による取得または当該証券（権利）もしくは新株予約権の行使により当社普通株式が交付されたものとみなして新株発行等による転換価額調整式を準用して算出してこれを適用する。

(d) 本（a）ないし（c）の場合において、当社普通株式の株主に割当てを受ける権利を与えるための基準日が設定され、かつ、効力の発生が当該基準日以降の株主総会、取締役会その他当社の機関の承認を

条件としているときには、本（a）ないし（c）にかかわらず、調整後の転換価額は、当該承認があった日の翌日以降これを適用する。この場合において、当該基準日の翌日から当該承認があった日までに新株予約権の行使請求をした新株予約権付社債の新株予約権者（以下「新株予約権者」という。）に対しては、次の算出方法により、当社普通株式を交付する。この場合に1株未満の端数を生じる場合は、これを切り捨て、現金による調整は行わない。

$$\text{株 式 数} = \frac{\left(\begin{array}{c} \text{調 整 前} \\ \text{転換価額} \end{array} - \begin{array}{c} \text{調 整 後} \\ \text{転換価額} \end{array} \right) \times \begin{array}{c} \text{調整前転換価額により当該} \\ \text{期間内に交付された株式数} \end{array}}{\text{調整後転換価額}}$$

- (e) 新株予約権付社債の発行後、本（f）に定める特別配当を実施する場合には、次に定める算式（以下「特別配当による転換価額調整式」という。）をもって転換価額を調整する。

$$\text{調 整 後} = \text{調 整 前} \times \frac{\text{時 価} - 1 \text{ 株 当 たり 特 別 配 当}}{\text{時 価}}$$

転換価額 転換価額

「1株当たり特別配当」とは、特別配当を、剰余金の配当にかかる当該事業年度の最終の基準日における各社債の金額（金100万円）当たりの新株予約権の目的となる株式の数で除した金額をいう。1株当たり特別配当の計算については、円位未満小数第2位まで算出し、小数第2位を四捨五入する。

- (f) 「特別配当」とは、下記のいずれかの事業年度内に到来する各基準日にかかる当社普通株式1株当たりの剰余金の配当（配当財産が金銭であるものに限り、会社法第455条第2項および第456条の規定により支払う金銭を含む。）の額に当該基準日時点における各社債の金額（金100万円）当たりの新株予約権の目的となる株式の数に乗じて得た金額の当該事業年度における累計額が、基準配当金（基準配当金は、各社債の金額（金100万円）を転換価額等決定日に確定する転換価額で除して得られる数値（小数第1位を切り捨てる。）に18を乗じた金額とする。）に当該事業年度にかかる本（f）に定める比率（当社が当社の事業年度を変更した場合には、本（f）に定める事業年度および比率は社債管理者と協議のうえ合理的に修正されるものとする。）を乗じた金額を超える場合における当該超過額をいう。

平成27年3月31日に終了する事業年度 1.30

平成28年3月31日に終了する事業年度 1.69

平成29年3月31日に終了する事業年度 2.20

平成30年3月31日に終了する事業年度 2.86

特別配当による転換価額の調整は、各事業年度の配当にかかる最終の基準日にかかる会社法第454条または第459条に定める剰余金の配当決議が行われた日の属する月の翌月10日以降これを適用する。

- (g) 新株発行等による転換価額調整式および特別配当による転換価額調整式（以下、本（g）および本（h）において「転換価額調整式」という。）により算出された調整後の転換価額と調整前の転換価額との差額が1円未満にとどまる限りは、転換価額の調整はこれを行わない。ただし、次に転換価額の調整を必要とする事由が発生し転換価額を算出する場合は、転換価額調整式中の調整前転換価額に代えて、調整前転換価額からこの差額を差引いた額を使用するものとする。

- (h) 転換価額調整式の計算については、円位未満小数第2位まで算出し、小数第2位を四捨五入する。転換価額調整式で使用する時価は、(イ)新株発行等による転換価額調整式の場合は調整後の転換価額を適用する日（ただし、本（d）の場合は基準日）、(ロ)特別配当による転換価額調整式の場合は当該事業年度の配当にかかる最終の基準日、に先立つ45取引日目に始まる30取引日の株式会社東京証券取引所における当社普通株式の普通取引の毎日の終値（気配表示を含む。）の平均値（終値のない日数を除く。）とする。この場合、平均値の計算は、円位未満小数第2位まで算出し、小数第2位を四捨五入する。

新株発行等による転換価額調整式で使用する既発行株式数は、(イ)当該募集において株主に株式の割当てを受ける権利を与える場合は、当該権利を与える株主を定めるための基準日、(ロ)それ以外の場合には、調整後の転換価額を適用する日の30日前の日、における当社の発行済普通株式数から、当該日における当社の有する当社普通株式の数を控除し、当該転換価額の調整前に交付株式数とみなされた当社普通株式のうち未だ交付されていない当社普通株式の数を加えた数とする。また、当社普通株式の株式分割が行われる場合には、新株発行等による転換価額調整式で使用する交付株式数は、基準日における当社の有する当社普通株式に割り当てられる当社普通株式の数を含まないものとする。

- (i) 当社は社債管理者と協議のうえその承認を得て、転換価額の調整を適切に行うものとする。
- (イ) 株式の併合、資本金もしくは準備金の額の減少、合併、会社分割または株式交換のために転換価額の調整を必要とするとき。
- (ロ) (イ)のほか、当社の発行済普通株式数の変更または変更の可能性が生じる事由の発生により転換価額の調整を必要とするとき。
- (ハ) 当社普通株式の株主に対する他の種類株式の無償割当てのために転換価額の調整を必要とするとき。
- (ニ) 金銭以外の財産を配当財産とする剰余金の配当が、経済的に特別配当に相当するために転換価額の調整を必要とするとき。
- (ホ) 転換価額を調整すべき事由が2つ以上相接して発生し、一方の事由にもとづく調整後の転換価額の算出にあたり使用すべき時価が、他方の事由による影響を考慮する必要があるとき。

5. 新株予約権の行使により発行する当社普通株式1株の発行価格は、当該行使請求にかかる新株予約権付社債についての各社債の金額の合計額を、(注)2の新株予約権の目的となる株式の数に記載の新株予約権の行使請求により当社が交付する当社普通株式の数で除して得られる金額となる。
- 新株予約権の行使により株式を発行する場合において増加する資本金の額は、会社計算規則第17条にしたがい算出される資本金等増加限度額の2分の1の金額とし、計算の結果1円未満の端数が生じたときは、その端数を切り上げるものとする。増加する資本準備金の額は、資本金等増加限度額から増加する資本金の額を減じた額とする。
6. 組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項
- ①当社が組織再編行為を行う場合は、組織再編行為による繰上償還を行う場合を除き、組織再編行為の効力発生日の直前において残存する新株予約権の新株予約権者に対して、当該新株予約権者の有する新株予約権に代えて、それぞれの場合につき、承継会社等の新株予約権で本6の②(a)ないし(h)の内容のもの(以下「承継新株予約権」という。)を交付する。この場合、組織再編行為の効力発生日において、新株予約権は消滅し、新株予約権付社債の社債部分にかかる債務は承継会社等に承継され(承継会社等に承継された新株予約権付社債についての社債にかかる債務を以下「承継社債」という。)、承継新株予約権は承継社債に付された新株予約権となり、新株予約権者は承継新株予約権の新株予約権者となるものとする。ただし、吸収分割または新設分割を行う場合は、以下の条件に沿って、その効力発生日の直前において残存する新株予約権の新株予約権者に対して当該新株予約権に代えて承継会社等の承継新株予約権を交付し、承継会社等が新株予約権付社債の社債部分にかかる債務を承継する旨を、吸収分割契約または新設分割計画において定めた場合に限るものとする。
- ②上記①の定めに従って交付される承継会社等の新株予約権の内容は下記のとおりとする。
- (a) 承継新株予約権の数
組織再編行為の効力発生日の直前において残存する新株予約権の数と同一とする。
 - (b) 承継新株予約権の目的である承継会社等の株式の種類
承継会社等の普通株式とする。
 - (c) 承継新株予約権の目的である承継会社等の株式の数の算定方法
行使請求にかかる承継新株予約権が付された承継社債の金額の合計額を本6②(d)に定める転換価額で除して得られる数とする。この場合に1株未満の端数を生じたときはこれを切り捨て、現金による調整は行わない。
 - (d) 承継新株予約権付社債の転換価額
組織再編行為の効力発生日の直前に新株予約権を行使した場合に新株予約権者が得られるのと同等の経済的価値を、組織再編行為の効力発生日の直後に承継新株予約権の新株予約権者がこれを行行使したときに受領できるように定めるものとする。なお、組織再編行為の効力発生日以後における承継新株予約権付社債の転換価額は、一定の調整を行う。
 - (e) 承継新株予約権の行使に際して出資される財産の内容およびその価額またはその算定方法
各承継新株予約権の行使に際しては、当該各承継新株予約権にかかる各承継新株予約権付社債の社債部分を出資するものとし、各承継新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、各新株予約権付社債の払込金額と同額とする。
 - (f) 承継新株予約権を行使することができる期間
組織再編行為等の効力発生日から、新株予約権の行使請求期間の満了日までとする。
 - (g) 承継新株予約権の行使の条件および承継新株予約権の取得条項
承継会社等の各新株予約権の一部について新株予約権を行使することはできないものとする。
 - (h) 承継新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金および資本準備金に関する事項
承継会社等の新株予約権の行使により株式を発行する場合において増加する資本金の額は、会社計算規則第17条にしたがい算出される資本金等増加限度額の2分の1の金額とし、計算の結果1円未満の端数が生じたときは、その端数を切り上げるものとする。増加する資本準備金の額は、資本金等増加限度額から増加する資本金の額を減じた額とする。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項なし。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成25年12月12日 (注) 1	△16,966	66,039	—	7,901	—	7,889
平成28年4月1日～ 平成29年3月31日 (注) 2	4,095	70,134	3,730	11,632	3,726	11,615
平成29年4月1日～ 平成30年3月31日 (注) 2	1,023	71,158	922	12,555	921	12,537

(注) 1 自己株式の消却による減少である。

2 新株予約権の権利行使による増加である。

(5) 【所有者別状況】

平成30年3月31日現在

平成30年3月31日現在

区分	株式の状況（1単元の株式数100株）							単元未満 株式の状況 （株）	
	政府及び 地方公共 団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人 その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)	—	50	32	91	252	6	4,756	5,187	—
所有株式数 (単元)	—	238,657	3,862	217,322	143,216	96	107,936	711,089	49,610
所有株式数 の割合(%)	—	33.56	0.54	30.56	20.14	0.02	15.18	100	—

(注) 自己株式230株は、「個人その他」に2単元、「単元未満株式の状況」に30株含まれている。

(6) 【大株主の状況】

平成30年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
九州電力株式会社	福岡市中央区渡辺通二丁目1番82号	15,980	22.45
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	5,376	7.55
株式会社西日本シティ銀行	福岡市博多区博多駅前三丁目1番1号	3,249	4.56
株式会社福岡銀行	福岡市中央区天神二丁目13番1号	3,133	4.40
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町二丁目11番3号	2,830	3.97
九電工従業員持株会	福岡市南区那の川一丁目23番35号	2,268	3.18
九電工労組	福岡市南区那の川一丁目24番1号	1,300	1.82
西日本鉄道株式会社	福岡市中央区天神一丁目11番17号	1,142	1.60
株式会社三菱東京UFJ銀行	東京都千代田区丸の内二丁目7番1号	1,133	1.59
STATE STREET BANK AND TRUST COMPANY (常任代理人 香港上海銀行東京支店)	ONE LINCOLN STREET, BOSTON MA USA 02111 (東京都中央区日本橋三丁目11番1号)	1,105	1.55
計	—	37,519	52.72

(注) 1 株式会社三菱東京UFJ銀行は、平成30年4月1日に株式会社三菱UFJ銀行に商号変更している。

2 平成29年5月22日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書において、アセットマネジメントOne株式会社及びその共同保有者であるアセットマネジメントOneインターナショナルが平成29年5月15日現在で以下の株式を所有している旨が記載されているものの、当社として平成30年3月31日時点における実質所有株式数の確認ができないので、上記大株主の状況には含めていない。

なお、大量保有報告書の内容は以下のとおりである。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数(千株)	株券等保有割合(%)
アセットマネジメントOne株式会社	東京都千代田区丸の内一丁目8番2号	2,963	4.22
アセットマネジメントOneインターナショナル	Mizuho House, 30 Old Bailey, London, EC4M 7AU, UK	582	0.83
計	—	3,545	5.05

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

平成30年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 200	—	—
	(相互保有株式) 普通株式 45,500	—	—
完全議決権株式(その他)	普通株式 71,063,200	710,632	—
単元未満株式	普通株式 49,610	—	1 単元(100株)未満の株式
発行済株式総数	71,158,510	—	—
総株主の議決権	—	710,632	—

② 【自己株式等】

平成30年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) ㈱九電工	福岡市南区那の川一丁目 23番35号	200	—	200	0.00
(相互保有株式) ㈱九建	福岡市中央区清川二丁目 13番6号	43,500	—	43,500	0.06
(相互保有株式) 西技工業㈱	福岡市中央区渡辺通二丁目 9番22号	2,000	—	2,000	0.00
計	—	45,700	—	45,700	0.06

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項なし。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項なし。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	1,615	7,426,340
当期間における取得自己株式	156	822,560

(注) 当期間における取得自己株式には、平成30年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めていない。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他(新株予約権の権利行使)	1,665	7,087,350	—	—
保有自己株式数	230	—	386	—

(注) 当期間における保有自己株式数には、平成30年6月1日から有価証券報告書提出日までの、単元未満株式の買取りによる株式数は含めていない。

3 【配当政策】

平成30年3月期の利益配分については、これまでの基本方針「中間配当・期末配当の年2回の実施と安定配当の継続を基本とし、業績や将来の企業体質強化に向けた内部留保を総合的に勘案しつつ、株主の皆さまへの利益還元に向けてまいります」に基づき実施する。

＜平成30年3月期の配当金＞

平成30年3月期の期末配当は、平成30年3月期の連結業績および財務状況等を踏まえ、1株当たり40円の普通配当に10円の特別配当を加えた1株当たり50円とする。

これにより年間の配当金は、中間配当40円と合わせ、1株当たり90円となる。

第90期の剰余金の配当は以下のとおりである。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
平成29年10月27日 取締役会決議	2,839	40
平成30年4月27日 取締役会決議	3,557	50

4 【株価の推移】

(1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第86期	第87期	第88期	第89期	第90期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
最高(円)	889	1,611	2,750	3,845	5,780
最低(円)	391	785	1,290	2,578	2,975

(注) 株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものである。

(2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成29年10月	11月	12月	平成30年1月	2月	3月
最高(円)	5,080	5,370	5,550	5,780	5,370	5,290
最低(円)	4,295	4,825	5,200	4,940	4,660	4,550

(注) 株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものである。

5 【役員の状況】

男性17名 女性0名 (役員のうち女性の比率0%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役会長		佐藤 尚文	昭和26年8月27日	平成24年6月 九州電力株式会社 取締役 常務執行役員 業務本部長 平成26年6月 同社 代表取締役 副社長 平成29年4月 同社 代表取締役 副社長 ビジネスソリューション統括本部長 平成30年6月 同社 代表取締役 副社長 ビジネスソリューション統括本部長 退任 平成30年6月 当社 取締役 会長(現)	(注) 3	—
取締役社長 代表取締役		西村 松次	昭和22年8月5日	昭和46年4月 当社入社 平成14年8月 佐賀支店長 平成16年6月 取締役 佐賀支店長 平成17年4月 取締役 福岡支店長 平成18年6月 常務取締役 福岡支店長 平成20年6月 専務執行役員 福岡支店長 平成21年6月 取締役 専務執行役員 福岡支店長 平成22年4月 取締役 専務執行役員 営業本部長 平成23年4月 取締役 専務執行役員 営業技術統括本部長 平成24年4月 取締役 専務執行役員 営業技術統括本部長 兼東京本社統括本部長 平成24年5月 取締役 副社長執行役員 営業技術統括本部長 兼東京本社統括本部長 平成25年4月 取締役 副社長執行役員 東京本社代表 平成25年6月 代表取締役 社長 東京本社代表 平成26年4月 代表取締役 社長(現)	(注) 3	118
取締役副社長 執行役員 代表取締役	東京本社 代表	猪野 生紀	昭和26年10月2日	昭和49年4月 当社入社 平成17年4月 鹿児島支店長 平成19年6月 取締役 鹿児島支店長 平成20年5月 取締役 平成20年6月 執行役員 平成21年4月 執行役員 東京本社副代表 平成22年4月 執行役員 東京本社統括本部 営業開発推進 本部長 平成22年6月 常務執行役員 東京本社統括本部 営業開発 推進本部長 平成23年4月 常務執行役員 東京本社統括本部 営業本部長 平成25年4月 常務執行役員 東京本社 営業本部長 平成26年4月 専務執行役員 東京本社代表 平成26年6月 取締役 専務執行役員 東京本社代表 平成27年6月 代表取締役 専務執行役員 東京本社代表 平成28年4月 代表取締役 副社長執行役員 東京本社代表 (現)	(注) 3	54
取締役副社長 執行役員 代表取締役	経営管理全般 担当	檜垣 博紀	昭和26年7月7日	平成11年4月 新日本製鐵株式会社 原料部長 平成20年7月 当社入社 経営企画部部長 平成21年4月 執行役員 関連事業部長 平成22年4月 執行役員 関連事業部長兼海外事業室長 平成23年4月 執行役員 平成24年5月 上席執行役員 平成25年4月 常務執行役員 平成25年6月 取締役 常務執行役員 平成27年4月 取締役 専務執行役員 平成29年4月 取締役 副社長執行役員 平成29年6月 代表取締役 副社長執行役員(現)	(注) 3	45
取締役 専務執行役員	営業本部長	石橋 和幸	昭和34年3月8日	昭和57年4月 当社入社 平成20年4月 人事労務部長 平成22年4月 北九州支店長 平成24年5月 執行役員 北九州支店長 平成25年4月 上席執行役員 平成25年6月 取締役 上席執行役員 平成27年4月 取締役 常務執行役員 平成29年4月 取締役 専務執行役員 営業本部長(現)	(注) 3	19

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
取締役 専務執行役員	技術本部長 資材担当	城 野 正 明	昭和30年1月1日	昭和48年4月 平成20年4月 平成23年4月 平成25年4月 平成26年4月 平成27年4月 平成27年6月 平成28年4月 平成29年4月	当社入社 情報通信本部情報通信部長 営業技術統括本部営業本部営業企画部長 執行役員 鹿児島支店長 上席執行役員 鹿児島支店長 常務執行役員 技術本部長兼エコ事業創生本部長 取締役 常務執行役員 技術本部長兼エコ事業創生本部長 取締役 常務執行役員 技術本部長 取締役 専務執行役員 技術本部長(現)	(注) 3	13
取締役 専務執行役員	電力本部長 安全担当	前 田 敬 治	昭和28年12月10日	平成24年6月 平成27年6月 平成29年4月	九州電力株式会社 執行役員 技術本部副本部長兼総合研究所長 当社 取締役 常務執行役員 電力本部長 取締役 専務執行役員 電力本部長(現)	(注) 3	3
取締役 常務執行役員	技術本部 副本部長	北 村 邦 彦	昭和27年12月10日	昭和52年4月 平成13年7月 平成14年7月 平成17年4月 平成21年4月 平成22年4月 平成25年4月 平成26年6月 平成27年12月 平成28年4月	当社入社 営業本部都市エネルギー室長 営業本部エネルギーソリューション室長 営業本部エネルギーソリューション部長 エコ事業推進本部 エネルギー事業部長 執行役員 エコ事業推進本部 副本部長 上席執行役員 エコ事業創生本部 副本部長 取締役 上席執行役員 エコ事業創生本部 副本部長 取締役 上席執行役員 エコ事業創生本部 副本部長兼総合研究開発室長 取締役 常務執行役員 技術本部 副本部長 (現)	(注) 3	48
取締役 常務執行役員	経営戦略企画 担当	北 川 忠 嗣	昭和33年1月4日	昭和55年4月 平成20年4月 平成24年4月 平成26年4月 平成27年4月 平成27年6月 平成29年4月	当社入社 経営企画部長 大分支店長 執行役員 大分支店長 上席執行役員 取締役 上席執行役員 取締役 常務執行役員(現)	(注) 3	8
取締役 常務執行役員	社長室、 人事労務、 総務担当	鹿 島 康 宏	昭和28年4月28日	昭和51年4月 平成24年3月 平成24年5月 平成25年4月 平成27年4月 平成29年4月 平成29年6月	当社入社 人財開発部長 執行役員 人財開発部長 執行役員 九電工アカデミー学長 上席執行役員 九電工アカデミー学長 常務執行役員 取締役 常務執行役員(現)	(注) 3	17
取締役 (非常勤)		渡 辺 顯 好	昭和17年8月10日	平成8年6月 平成10年6月 平成13年6月 平成14年6月 平成14年6月 平成20年6月 平成21年6月 平成23年6月 平成23年6月	トヨタ自動車株式会社 取締役 トヨタ自動車九州株式会社 取締役(非常勤) トヨタ自動車株式会社 常務取締役 同社 常務取締役 退任 トヨタ自動車九州株式会社 代表取締役社長 同社 代表取締役会長 九州電力株式会社 取締役(非常勤)(現) トヨタ自動車九州株式会社 相談役 当社 取締役(現)	(注) 3	—
取締役 (非常勤)		倉 富 純 男	昭和28年8月13日	平成20年6月 平成23年6月 平成25年6月 平成26年6月 平成28年6月	西日本鉄道株式会社 取締役執行役員 都市開発事業本部長 同社 取締役常務執行役員 経営企画本部長 同社 代表取締役社長(現) 株式会社福岡中央銀行 取締役(非常勤)(現) 当社 取締役(現)	(注) 3	0

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
監査役 常勤		古 川 英 博	昭和32年3月21日	昭和56年4月 平成20年5月 平成23年4月 平成26年4月 平成27年5月 平成27年6月	当社入社 総務部長 宮崎支店長 執行役員 宮崎支店長 執行役員 監査役(現)	(注) 4	11
監査役 常勤		緒 方 勇	昭和31年5月29日	昭和55年4月 平成23年4月 平成25年4月 平成28年4月 平成28年6月	当社入社 電力本部配電企画部長 電力本部副本部長兼配電部長 社長室付部長 監査役(現)	(注) 5	3
監査役 非常勤		福 重 康 行	昭和25年1月20日	平成20年3月 平成22年3月 平成24年3月 平成25年3月 平成25年6月 平成30年3月	株式会社正興電機製作所 取締役 上級執行役員 モノづくり本部長兼古賀事業所長兼事業開発本部副本部長 同社 取締役 常務執行役員 同社 取締役 専務執行役員 営業統括本部長 同社 代表取締役 社長 当社 監査役(現) 株式会社正興電機製作所 相談役(現)	(注) 6	—
監査役 非常勤		佐々木 有 三	昭和28年4月18日	平成22年6月 平成22年7月 平成23年6月 平成26年6月 平成28年6月 平成29年4月 平成29年6月	九州電力株式会社 執行役員 土木部長 同社 執行役員 技術本部土木部長 同社 上席執行役員 技術本部長 同社 取締役 常務執行役員 技術本部長 同社 代表取締役 副社長 技術本部長 同社 代表取締役 副社長 テクニカルソリューション統括本部長(現) 当社 監査役(現)	(注) 6	—
監査役 非常勤		酒 見 俊 夫	昭和28年2月27日	平成20年6月 平成21年4月 平成23年4月 平成23年6月 平成25年4月 平成29年6月	西部瓦斯株式会社 執行役員 エネルギー統轄本部リビングエネルギー本部長兼リビング企画部長 株式会社マルタイ 代表取締役 社長 西部瓦斯株式会社 常務執行役員 同社 取締役 常務執行役員 同社 代表取締役 社長 社長執行役員(現) 当社 監査役(現)	(注) 6	—
計							343

- (注) 1 取締役 渡辺顯好、倉富純男は、社外取締役である。
- 2 監査役 福重康行、佐々木有三及び酒見俊夫は、社外監査役である。
- 3 取締役の任期は、平成30年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成31年3月期に係る定時株主総会終結の時までである。
- 4 監査役 古川英博の任期は、平成27年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成31年3月期に係る定時株主総会終結の時までである。
- 5 監査役 緒方勇の任期は、平成28年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成32年3月期に係る定時株主総会終結の時までである。
- 6 監査役 福重康行、佐々木有三及び酒見俊夫の任期は、平成29年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成33年3月期に係る定時株主総会終結の時までである。

- 7 当社は執行役員制度を採用している。取締役兼務者を除く執行役員は、平成30年6月29日現在で次の21名である。

専務執行役員	福岡支店長	上 田 宰 二
専務執行役員	東京本社営業本部長	武 井 秀 樹
専務執行役員	北九州支店長	山 本 泰 弘
常務執行役員	東京本社東京支社長	石 原 英 樹
常務執行役員	営業本部副本部長	福 井 慶 蔵
常務執行役員	宇久島メガソーラー事業担当	塚 原 修 二
上席執行役員	海外営業の特命案件に関する事項	田 中 義 朗
上席執行役員	財務部長	高 田 勝 則
上席執行役員	電力本部副本部長	外 堀 隆 博
上席執行役員	佐賀支店長	大 嶋 知 行
上席執行役員	熊本支店長	陶 山 和 浩
上席執行役員	鹿児島支店長	中 島 雄 二
上席執行役員	技術本部副本部長	野 上 精 一
執行役員	技術本部副本部長 兼 技術設計部長	柴 田 典 顕
執行役員	技術本部副本部長 兼 技術管理部長	木 下 克 寿
執行役員	営業本部副本部長	佐 藤 陽 一
執行役員	宮崎支店長	濱 田 信 仁
執行役員	大分支店長	竹 中 休 義
執行役員	東京本社横浜支社長	真 鍋 良 二
執行役員	関西支店長	天 川 雅 清
執行役員	東京本社営業本部副本部長	徳 永 修 一

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

① 企業統治の体制

当社は、「企業理念」の実現を通じて、持続的な成長及び長期的な企業価値の向上を図り、株主、お客様、地域社会をはじめとする全てのステークホルダーから支持され、企業経営を適正かつ効率的に行うため、九電工 コーポレートガバナンス ガイドラインを制定し、最良のコーポレートガバナンスを実現することに取り組んでいる。

《企業理念》

1. 快適な環境づくりを通して社会に貢献します。
2. 技術力で未来に挑戦し、新しい価値を創造します。
3. 人をいかし、人を育てる人間尊重の企業をめざします。

なお、当社の「九電工 コーポレートガバナンス ガイドライン」は、当社のホームページに掲載している。

当社は、取締役会及び監査役会設置会社制度を採用するなかで、取締役会の「意思決定・監督機能」と「業務執行機能」を分離し、効率的かつスピーディーな経営を実践することを目的とした「執行役員制度」を導入するとともに、業務のリスク管理及び効率性と適法性との調和を確保し、維持するため、「内部統制システム」を構築するなど、「コーポレート・ガバナンスの充実」を図っていく。

当社は、取締役は15名以内とし、取締役の選任は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上に当たる株式を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨、及び累積投票によらない旨を定款に定めている。

当社は、原則として社外取締役2名を含む12名の取締役で組織される取締役会を毎月開催している。また意思決定の透明性と取締役会の機能の独立性・客観性を確保するため、独立社外取締役を含めた取締役3人以上の委員からなる報酬諮問委員会及び指名諮問委員会を設置している。

報酬諮問委員会では、「年間取締役報酬総額及び年間監査役報酬総額の決定に関する株主総会議案」を起案し、取締役会での決議の上、株主総会に付議する他、「取締役報酬の個人年間基本報酬額の決定」「取締役報酬のうちインセンティブ部分の査定及び改定」「執行役員報酬の役職別個人年間基本報酬額の改定」「執行役員報酬のうちインセンティブ部分に関する目標管理の査定及び改定」について審議し、代表取締役社長に答申している。

指名諮問委員会では、取締役・監査役候補の指名及び取締役の解任、並びに、執行役員の選任及び解任の事項について策定し、その内容を取締役に付議している。

上記に加えて、取締役会付議事項のうち、予め協議を有する事項及び重要な業務の実施に関する事項について協議する経営会議（毎週1回）、並びに業務執行状況の確認を行う支店長会議（年9回）を定期的に開催している。

当社は、機動的な資本政策及び配当政策を図るため、剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項については、法令に別段の定めのある場合を除き、株主総会の決議によらず取締役会の決議によって定める旨を定款に定めている。

当社は、監査役が株主から直接選任され、監査の主体と客体の峻別がなされていることや、法的に監査役の権限と独立性が担保されていることから、監査役制度を採用している。

監査役会は、社外監査役3名を含む5名で構成され、取締役会やその他の重要会議に出席し、経営全般に関する客観的かつ公正な意見陳述を行うとともに、取締役の業務執行に対しての適法性及びリスク管理への対応などを含めた妥当性の監査を継続的に実施している。また、子会社の業務・財産の状況を調査し、グループ全般の監視・監督機能を果たしている。

当社は、コンプライアンスの基本方針及び活動内容の決定・諸計画の立案、実施方法の決定・対策協議等を行うコンプライアンス委員会（代表取締役社長を委員長とする）を設置している。また、社長室内部統制グループが行う内部監査結果（改善対策等を含む）及び内部統制の有効性評価が報告される内部統制委員会（代表取締役社長を委員長とする）を設置している。

なお、当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めている。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものである。

内部統制システムの整備の状況及びリスク管理体制の整備の状況について、当社は、今日まで積み重ねてきた法令遵守の経営体制と企業文化を生かしつつ、企業経営を適正かつ効率的に行う「コーポレート・ガバナンスの充実」を図り、継続的な発展を期するため、「取締役の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制」の構築を図っている。

また、業務のリスク管理及び適法性と効率性との調和を確保し、維持するための仕組みを構築することにより、当社及びグループ会社にわたるコンプライアンス活動を活発に行い、経営の透明性と公正性を高めることで、株主、お客様、地域社会をはじめとするステークホルダーからの信頼に応えながら広く社会に貢献し、「企業価値の向上」に取り組んでいる。

なお、当社の主な内部統制システムとリスク管理体制の整備状況は、以下のとおりである。

1. 取締役・使用人の職務執行が法令・定款に適合することを確保するための体制
 - (a) 代表取締役社長は、九電工行動憲章を制定し、繰り返しその精神を役職員に伝えることにより、法令遵守及び社会倫理の遵守を企業活動の前提とすることを徹底する。
 - (b) 代表取締役社長を委員長とするコンプライアンス委員会にて、コンプライアンス上の重要な問題を審議し、その結果を取締役に報告する。
 - (c) コンプライアンス担当部署を社長室とし、全社横断的なコンプライアンス体制の整備及び問題点の把握に努め、教育の実施によるマニュアルを周知徹底する。また、各担当取締役等は、各業務部門固有のコンプライアンスリスクを分析し、その対策を具体化する。
 - (d) 取締役及び監査役がコンプライアンス上の問題を発見した場合は、すみやかにコンプライアンス委員会に報告する体制を構築するとともに、従業員が直接報告・相談できる九電工グループコンプライアンス相談窓口（社内窓口：電話・FAX・E-mail、社外窓口：電話・E-mail）を設置する。
 - (e) 社長室は、従業員から報告・通報を受けた場合、その内容を調査し、再発防止策を担当部門と協議のうえ、コンプライアンス委員会に報告し、全社的な再発防止策を実施する。
 - (f) 反社会的勢力からの不当要求等に対しては、組織全体で毅然として対応し、一切の関係を遮断する。
2. 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する事項

代表取締役社長は、文書管理取締役等を任命し、取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理につき、文書管理規程に従い、職務執行に係る情報を文書または電磁的媒体に記録し、適正に保管させる。
3. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制
 - (a) コンプライアンス、環境、災害、品質及び情報セキュリティ等に係るリスクについては、それぞれの担当部署にて、規則・ガイドラインの制定、研修の実施、マニュアルの作成・配布等を行うものとし、組織横断的リスク状況の監視及び全社的対応は、総務部が行うものとする。
 - (b) 社長室内部統制グループにて、当社各部署及び各支店のリスク管理の状況を監査するとともに、その結果を定期的に、代表取締役社長を委員長とする内部統制委員会に報告する。また、担当取締役等は、改善策を審議・決定し、取締役会に報告する。
4. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
 - (a) 組織及び職務権限規程において、各部署の分掌事項、各職位の基本的役割と職務及び権限等を定める。
 - (b) 代表取締役社長が指名する取締役等を構成員とする経営会議を設置し、取締役会の議事を充実させるように事前に検討を行うとともに、効率的な業務の執行が行えるように調整する。
 - (c) 取締役会による中期経営計画の策定、ITを活用した月次・四半期業績管理を実施する。

5. 子会社の取締役・使用人の職務執行が法令・定款に適合することを確保するための当社における体制
 - (a) 当社及び当社が直接的に経営管理する子会社（以下「子会社等」という。）では、当社で作成した「グループ・コンプライアンス・マニュアル」を基に、取締役・従業員一体となった遵守意識の醸成を図る。
 - (b) 子会社等で発生したコンプライアンス上の重要な問題は、当社のコンプライアンス委員会にて審議し、その結果を当社取締役会に報告する。
 - (c) 国内の子会社等の従業員がコンプライアンス上の問題を発見した場合は、直接当社に報告・相談できる九電グループコンプライアンス相談窓口を設置する。
6. 子会社の損失の危険の管理に関する当社における体制
 - (a) 子会社等で「事業運営に関するリスク管理」取組表を作成し、当社社長室内部統制グループにて、その運用状況を確認する。
 - (b) 当社社長室内部統制グループにて、子会社等のリスク管理の状況を内部監査するとともに、その結果を定期的に、当社内部統制委員会に報告する。
7. 子会社の取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための当社における体制
 - (a) 当社の年度毎の「経営基本方針」を国内の子会社等に示し、その方針に基づいて策定した各子会社等の年度方針の進捗状況を、当社で点検する。
 - (b) 当社の取締役及び常勤監査役並びに国内の子会社等の社長を主要メンバーとする関連会社社長会を定期的に開催し、グループ戦略等について情報の共有を図る。
8. 子会社の取締役の職務の執行に係る事項の当社への報告に関する体制
 - (a) 当社で定める「関連会社運営規程」で子会社等からの報告事項を定め、当社経営戦略企画室を中心とする報告体制を構築し、特に重要な報告事項は、当社の経営会議及び取締役会に報告する。
 - (b) 子会社等における経営上の重要な事項については、「関連会社運営規程」で事前協議事項を定め、当社と事前協議し、また、特に重要な事項については、当社の経営会議及び取締役会に付議を行い、意思決定する。
 - (c) 社長室内部統制グループにて、子会社等の報告状況・事前協議状況について内部監査によるモニタリングを行う。
9. 監査役会がその補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する体制
監査役室に専属の従業員を配置し、監査業務を補助するものとする。
10. 監査役職務を補助すべき使用人の取締役からの独立性に関する事項、並びに監査役の使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項
 - (a) 監査役会は監査役室に属する従業員の人事異動について、事前に人事担当取締役等より報告を受けるとともに、必要がある場合には、理由を付して当該人事異動につき変更を人事担当取締役等に申し入れることができるものとする。
 - (b) 監査役室の従業員は、監査役の指示の実効性を確保するために、当社の業務執行に係る役職を兼務させない。
11. 当社の取締役及び使用人が監査役会に報告するための体制その他の監査役会への報告に関する体制
 - (a) 監査役会に報告すべき事項を定める規定を制定し、取締役は、次に定める事項を報告する。
 - ・ 取締役会で決議された事項
 - ・ 会社に著しい損害を及ぼすおそれのある事項
 - ・ その他のコンプライアンス上重要な事項
 - (b) 従業員は、会社に著しい損害を及ぼすおそれのある重大な事実を発見した場合、監査役に直接報告することができるものとする。

12. 子会社の取締役、監査役及び使用人又はこれらの者から報告を受けた者が監査役に報告するための体制
- (a) 経営会議及び取締役会に子会社等に関する報告事項、付議される事前協議事項については、監査役の経営会議及び取締役会への出席をもって報告とする。
 - (b) 当社社長室内部統制グループが行う子会社等の内部監査の結果及び改善対策について、監査役が内部統制委員会に出席する他、社長室内部統制グループが監査役に事前に報告する。
 - (c) 子会社等のコンプライアンス違反事項及び九電工グループコンプライアンス相談窓口への報告・相談された事項について、監査役がコンプライアンス委員会に出席する他、社長室内部統制グループから監査役に事前に報告する。
 - (d) 子会社等が自ら発見した重大な法令違反や重大なコンプライアンス違反については、遅滞なく当社の経営戦略企画室に報告し、経営戦略企画室から監査役に報告する。
 - (e) 子会社等の取締役、監査役及び使用人は、著しい損害を及ぼすおそれのある重大な事実を発見した場合、当社の監査役に直接報告することができるものとする。
13. 監査役へ報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制
- コンプライアンス委員会運営規程において、九電工グループコンプライアンス相談窓口への情報提供及び相談者に対しては、人事、給与、また就業環境を害することなどの不利益な取扱いの禁止を定めている。
14. 監査役職務について生ずる費用の前払又は償還の手続その他職務の執行について生ずる費用又は債務の処理に関する方針に関する事項
- 監査役会に対して、監査にかかる諸費用について、監査の実効性を担保するべく予算を確保する。
15. その他監査役会の監査が実効的に行われることを確保するための体制
- (a) 監査役会と代表取締役社長との間の定期的な意見交換会を設定する。
 - (b) 監査役会に対して、外部の専門家を活用し、監査業務に関する助言を受ける機会を保障する。

② 内部監査及び監査役監査

内部監査を実施する社長室内部統制グループ(12名)は、各部署における経営諸活動が経営方針に基づき遂行されているかを評価することに加え、規程、職務権限、マニュアル等の社内ルールに沿って適正に処理されているかを監査し、その監査結果を内部統制委員会へ報告している。内部監査結果の報告を受けた担当取締役等は、改善策を策定のうえ、必要に応じ、取締役会等へ報告している。

また社長室内部統制グループは、被監査機関に対し、改善のための助言・勧告を行うとともに、改善対策報告書の提出を求め、改善に向けたフォローアップを行うなど、必要に応じた事後点検監査を実施している。

監査役監査は、監査役会が定めた監査の方針、監査計画に従って実施している。具体的には、取締役会その他重要な会議に出席する他、取締役などからその職務の執行状況の聴取、重要な決裁書類などの閲覧、本社及び主要な事業所において業務及び財産の状況の調査などを行っている。また、必要に応じて子会社に対し営業の報告を求め、子会社の業務・財産の状況を調査し、グループ全般の監視・監督機能を果たしている。

また、監査役及び監査役会の職務を補佐するために監査役室を設置して専属従業員(5名)を配置し、効率的な監査役監査活動が実現できるように努めている。なお、監査役会は監査役室に属する従業員の人事異動について、事前に人事担当取締役等より報告を受けるとともに、必要がある場合には、理由を付して変更を人事担当取締役等に申し入れることができる。

監査役は、会計監査人から、会計監査計画の概要及び監査の実施結果について定期的に報告を受けるとともに、必要に応じて相互に情報交換及び意見交換を行っている。また、監査役は、会計監査人選任に関する決定権等行使することにより、経営からの独立性を確保し、会計監査人監査の実効性確保にも努めている。

社長室内部統制グループは実施した内部監査結果について監査役に逐次報告及び意見交換を行うなど、内部監査と監査役監査は連携を強化することで、コーポレート・ガバナンスの向上に努めている。

社長室内部統制グループは、会計監査人の会計監査時の内部統制上の疑義について調査等を行い、当社の見解を報告するなどの相互連携を行っている。

③ 社外取締役及び社外監査役

当社の取締役は12名であり、このうち社外取締役として2名を選任している。監査役は5名であり、このうち社外監査役として3名を選任している。

当社は、独立性判断基準を以下のとおり定めている。

《独立性判断基準》

当社は、以下の事項に該当しない場合、社外取締役及び社外監査役（以下、社外役員）に独立性があると判断する。

社外役員本人、配偶者又は二親等以内の親族について

- (a) 現在において当社又は当社グループ会社の業務執行者である者、又は当該就任の前10年間に於いて当社又は当社グループ会社の業務執行者であった者
- (b) 当社の取引先であって、当社単体の直近に終了した過去3事業年度のいずれかに於いて、当社に、当社単体のその事業年度の売上高の2%を超える金額の支払いを行った法人等の業務執行者である者、若しくは、当社の資金調達において必要不可欠であり、代替性がない程度に依存している金融機関の業務執行者である者
- (c) 当社を取引先とする、当社単体の直近に終了した過去3事業年度のいずれかに於いて、当社から、当該取引先単体のそれぞれの直近に終了した事業年度の売上高5%を超える金額の支払いを受領した法人等の業務執行者である者
- (d) 当社単体の直近に終了した過去3事業年度のいずれかに於いて、法律、会計若しくは税務の専門家又はコンサルタントとして、当社から直接的に1,000万円を超える報酬（当社役員としての報酬を除く）を受けている者（報酬を得ている者が団体である場合は、その団体に所属する者）
- (e) 当社単体の直近に終了した過去3事業年度の平均で年間1,000万円を超える寄付又は助成金を受けている団体等に所属する者
- (f) 実質的に当社の議決権の10%以上の株式を保有する株主たる法人等の業務執行者である者

〔注記〕

業務執行者とは、業務執行取締役、執行役員、その他の職員、従業員をいう。

社外取締役2名のうち渡辺顯好氏は、トヨタ自動車九州株式会社の出身者（平成14年6月同社代表取締役社長、平成20年6月同社代表取締役会長、平成23年6月同社相談役、平成27年6月同社相談役退任）であり、トヨタ自動車九州株式会社と当社との間には、3,111百万円の建設工事の請負及び2百万円の工事所の賃借料の取引が存在している（平成30年3月期実績）。以上のとおり、トヨタ自動車九州株式会社と取引関係があるが、当社の独立性判断基準を充たしており、当社の意思決定に対して重大な影響を与える取引ではない。

また、当社の筆頭株主である九州電力株式会社の社外取締役であるが、過去及び現在において同社の業務執行者であったことはなく、当社との間には特別な利害関係はない。

渡辺顯好氏には、異業種・他業界の代表取締役経験者として培った経営全般に関する豊富な経験と監督能力に加え、メーカーにおけるものづくりに関する知見に基づき、取締役会において独立した客観的・専門的な視点から有益な助言をいただき、業務執行に対する監督など適切な役割を果たしていることから、社外取締役に選任している。

倉富純男氏は、西日本鉄道株式会社の代表取締役社長執行役員であり、同社は当社議決権数の1.60%を所有している。西日本鉄道株式会社と当社との間には、694百万円の建設工事の請負の他、14百万円の株式配当金を受け取り、91百万円の株式配当金の支払いの取引が存在している（取引額については全て平成30年3月期実績）。以上のとおり、西日本鉄道株式会社との間に工事取引及び資本的関係があるが、当社の独立性判断基準を充たしており、当社の意思決定に対して重大な影響を与える取引ではない。

倉富純男氏は、異業種・他業界の代表取締役に従事しており、グループ経営に関する高い見識と監督能力に加え、地域経済に関する知見に基づき、取締役会において独立した客観的・専門的な視点から有益な助言をいただき、業務執行に対する監督など適切な役割を果たしていることから、社外取締役に選任している。

また、当社取締役会長の佐藤尚文氏（平成24年6月九州電力株式会社取締役常務執行役員業務本部長、平成26年6月同社代表取締役副社長、平成29年4月同社代表取締役副社長ビジネスソリューション統括本部長、平成30年6月同社代表取締役副社長退任、当社取締役会長）が平成28年6月より西日本鉄道株式会社の取締役監査等委員に就任している。

なお、サポート体制として、社長室に担当秘書を置き社内各部門との連絡調整を行っている。

また、渡辺顯好氏、倉富純男氏の2名は、当社が定める「社外役員の独立性判断基準」の各事項に抵触しないことを確認しており、一般株主との利益相反が生じるおそれのない独立役員として届出を行っている。

社外監査役3名のうち福重康行氏は、株式会社正興電機製作所の出身者（平成25年3月同社代表取締役社長、平成30年3月同社相談役）であり、同社は当社議決権数の0.76%を所有している。株式会社正興電機製作所と当社との間には、13百万円の建設工事の請負及び383百万円の当社の仕入の他、25百万円の株式配当金を受け取り、43百万円の株式配当金の支払いの取引が存在している（取引額については全て平成30年3月期実績）。また、当社出身の塩月輝雄氏（平成22年4月当社執行役員、平成27年3月当社上席執行役員退任、平成27年4月九電工新エネルギー株式会社代表取締役社長、平成28年3月同社代表取締役社長退任）が、平成28年3月より株式会社正興電機製作所の社外監査役に就任している。

佐々木有三氏は、当社の筆頭株主である九州電力株式会社の代表取締役副社長執行役員であり、同社は当社議決権数の22.65%（直接所有22.49%、間接所有0.17%）を所有しており、当社は同社の関連会社にあたる。九州電力株式会社と当社の間には、46,768百万円の配電線工事の請負及び建設工事の請負の取引が存在し、当社完成工事高に占める割合は14.63%である。その他、当社設置の太陽光発電施設及び風力発電施設から九州電力株式会社へ910百万円の売電取引及び、1,278百万円の株式配当金支払いの取引が存在している（取引額については全て平成30年3月期実績）。また、当事業年度末現在において、同社から10名の出向者を受け入れている。なお、坂口盛一氏（平成24年6月九州電力株式会社取締役常務執行役員経営企画本部長、平成26年6月同社退任、平成26年6月日本タングステン株式会社代表取締役取締役会長、平成29年6月同社取締役（非常勤）、平成29年8月同社取締役退任）が二親等以内の親族に該当する。日本タングステン株式会社と当社との間には、資金的関係はなく、5百万円の建設工事の請負の取引が存在している（平成30年3月期実績）。

当社は九州電力株式会社を中心とする九州電力グループに所属する同社の持分法適用関連会社である。なお工事の受注に際しての取引条件は、市場価格等を勘案し、価格交渉のうえ、一般的取引条件と同様に決定している。

このように九州電力株式会社との間に工事取引や人的・資金的関係があるが、当社は九州電力株式会社の事業とは異なる設備工事の分野で、当社の経営方針や独自の経営判断に基づき事業活動を展開していることから、一定の独立性が確保されていると認識している。

酒見俊夫氏は、西部瓦斯株式会社の代表取締役社長 社長執行役員であり、同社は当社議決権数の0.88%を所有している。西部瓦斯株式会社と当社の間には、236百万円の当社の仕入の他、12百万円の株式配当金を受け取り、50百万円の株式配当金の支払いの取引が存在している（取引額については全て平成30年3月期実績）。以上のとおり、西部瓦斯株式会社との間に工事取引及び資金的関係があるが、当社の独立性判断基準を充たしており、当社の意思決定に対して重大な影響を与える取引ではない。

社外監査役3名については、企業経営者として豊富な経験、幅広い知見を有しており、経営全般の監視と有効な助言を期待し、社外監査役に選任している。

社外監査役3名は、監査役監査結果報告・会計監査結果報告の他、内部監査結果並びに内部統制の有効性評価について監査役会を通じて受け、また常勤監査役から監査を実施する上で必要な会社情報の説明や資料を受けるとともに、取締役会の構成メンバーとして出席し、監査役会決議の討議討論及び中立的な立場からの発言を行い、経営全般の監視と監督を行っている。

また、酒見俊夫氏は、当社が定める「社外役員の独立性判断基準」の各事項に抵触しないことを確認しており、一般株主との利益相反が生じるおそれのない独立役員として届出を行っている。

社外取締役2名と社外監査役3名の5名とは、いずれも当社と会社法第423条第1項の賠償責任を限定する契約を締結しており、当該契約に基づく賠償責任の限度額は法令に定める額としている。

④ 役員の報酬等

イ 提出会社の役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)				対象となる 役員の員数 (名)
		基本報酬	ストック オプション	賞与	退職慰労金	
取締役(社外取締役を除く)	279	279	—	—	—	11
監査役(社外監査役を除く)	49	49	—	—	—	2
社外役員	31	31	—	—	—	7

ロ 提出会社の役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載していない。

ハ 役員の報酬等の額の決定に関する方針

当社の取締役の報酬については、職務遂行の対価として、株主総会で決議された報酬総額の範囲内において、職位別に定めた基本取締役報酬年額の一部について、「連結営業利益額」の達成度に連動した額を次年度の報酬月額に加減算して支給する、「業績連動型役員報酬」を採用している。なお、社外取締役には、インセンティブに基づく取締役報酬の増減については、適用していない。監査役の報酬については、株主総会で決議された報酬総額の範囲において一定の基準に基づき監査役の協議によって定めている。

また、九電工役員持株会を設けており、中長期的な会社の業績や潜在的リスクを反映させたインセンティブ付けのひとつとして、株主との価値共有を促進することを目的に、取締役、監査役及び執行役員は、基本報酬額の一定比率以上の当社株式を購入している。

⑤ 株式の保有状況

イ 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

銘柄数	149銘柄
貸借対照表計上額の合計額	20,674百万円

ロ 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の銘柄、保有区分、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的

(前事業年度)
特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表 計上額 (百万円)	保有目的
九州旅客鉄道(株)	985,000	3,373	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)ふくおかフィナンシャルグループ	3,225,138	1,554	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)西日本フィナンシャルホールディングス	1,334,076	1,484	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)正興電機製作所	1,619,368	1,084	総務・資材・営業に係る業務のより円滑な推進のため
大和ハウス工業(株)	300,000	958	建築設備の受注施工に係る業務のより円滑な推進のため
住友不動産(株)	331,000	955	建築設備の受注施工に係る業務のより円滑な推進のため
西日本鉄道(株)	2,000,000	938	総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
松竹(株)	640,000	839	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	1,059,710	741	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
西部瓦斯(株)	1,668,000	427	総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
日本空港ビルデング(株)	100,000	386	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
松井建設(株)	330,000	330	建築設備の受注施工に係る業務のより円滑な推進のため
(株)筑邦銀行	1,347,130	300	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)西武ホールディングス	163,500	300	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
サッポロホールディングス(株)	60,000	180	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)三越伊勢丹ホールディングス	144,195	176	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
RKB毎日放送(株)	35,168	175	総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)三井住友フィナンシャルグループ	36,183	146	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
久光製薬(株)	17,000	108	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
イオン(株)	66,047	107	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)福岡中央銀行	250,000	94	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
ロイヤルホールディングス(株)	40,220	90	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)富士ピー・エス	265,221	81	総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)ブリヂストン	11,000	49	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)ダイヘン	67,760	49	総務・資材・営業に係る業務のより円滑な推進のため
第一交通産業(株)	44,000	38	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)十八銀行	100,717	36	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)名村造船所	50,000	33	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)佐賀銀行	100,000	30	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)スターフライヤー	8,000	28	総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため

(当事業年度)
特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表 計上額 (百万円)	保有目的
九州旅客鉄道(株)	985,000	3,260	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)ふくおかフィナンシャルグループ	3,225,138	1,848	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)西日本フィナンシャルホールディングス	1,334,076	1,646	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)正興電機製作所	1,619,368	1,527	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
住友不動産(株)	331,000	1,302	建築設備の受注施工に係る業務のより円滑な推進のため
大和ハウス工業(株)	300,000	1,230	建築設備の受注施工に係る業務のより円滑な推進のため
西日本鉄道(株)	400,000	1,112	総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
松竹(株)	64,000	965	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	1,059,710	738	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
西部瓦斯(株)	166,800	459	総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
日本空港ビルデング(株)	100,000	406	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)西武ホールディングス	163,500	302	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)筑邦銀行	134,713	293	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
松井建設(株)	330,000	262	建築設備の受注施工に係る業務のより円滑な推進のため
戸田建設(株)	339,518	261	建築設備の受注施工に係る業務のより円滑な推進のため
(株)RKB毎日ホールディングス	35,168	225	総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
サッポロホールディングス(株)	60,000	186	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)三越伊勢丹ホールディングス	144,195	169	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)三井住友フィナンシャルグループ	36,183	161	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
久光製薬(株)	17,000	140	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
イオン(株)	66,047	125	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)福岡中央銀行	25,000	94	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)ブリヂストン	11,000	50	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
第一交通産業(株)	44,000	43	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)スターフライヤー	8,000	38	総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)トクヤマ	10,000	33	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)名村造船所	50,000	30	建築設備の営業に係る業務のより円滑な推進のため
三井住友トラスト・ホールディングス(株)	6,445	27	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)十八銀行	100,717	27	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため
(株)佐賀銀行	10,000	23	財務・総務・営業に係る業務のより円滑な推進のため

みなし保有株式
該当事項はない。

ハ 保有目的が純投資目的である投資株式

	前事業年度 (百万円)	当事業年度 (百万円)				
		貸借対照表 計上額の合計額	貸借対照表 計上額の合計額	受取配当金 の合計額	売却損益 の合計額	評価損益の合計額
	含み損益					減損処理額
非上場株式	—	—	—	—	—	—
非上場株式以外の株式	741	768	18	19	304	—

⑥ 会計監査の状況

会計監査業務については、新日本有限責任監査法人と監査契約を締結し、会社法監査及び金融商品取引法監査を受けている。当事業年度において業務を執行した公認会計士の氏名、会計監査業務に係る補助者の構成については以下のとおりであり、当社と同監査法人または業務執行社員との間には、特別な利害関係はない。

1. 当社の会計監査業務を執行した公認会計士の氏名、所属監査法人及び継続監査年数

業務執行社員：東 能利生、新日本有限責任監査法人所属

業務執行社員：宮本 義三、新日本有限責任監査法人所属

(注) 継続監査年数については、全員7年以内であるため、記載を省略している。

2. 当社の監査業務に係る補助者の構成

公認会計士17名 会計士試験合格者7名 その他12名

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に 基づく報酬(百万円)	非監査業務に 基づく報酬(百万円)	監査証明業務に 基づく報酬(百万円)	非監査業務に 基づく報酬(百万円)
提出会社	51	4	53	1
連結子会社	—	—	—	—
計	51	4	53	1

② 【その他重要な報酬の内容】

前連結会計年度

当社の連結子会社である九連環境開発股份有限公司(台湾)は、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属している安永聯合會計師事務所に対し、財務諸表監査や税務監査等の報酬として、1百万円を支払っている。

当社の連結子会社であるASIA PROJECTS ENGINEERING PTE. LTD. (シンガポール共和国)は2百万円、KYUDENKO SOUTH EAST ASIA PTE. LTD. (シンガポール共和国)は1百万円、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属しているErnst & Young LLPに対し、財務諸表監査や税務監査等の報酬として、合計4百万円を支払っている。

当連結会計年度

当社の連結子会社である九連環境開発股份有限公司(台湾)は、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属している安永聯合會計師事務所に対し、財務諸表監査や税務監査等の報酬として、2百万円を支払っている。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

前連結会計年度

デューディリジェンス業務等。

当連結会計年度

デューディリジェンス業務等。

④ 【監査報酬の決定方針】

該当事項はないが、監査日程等を勘案し、協議の上決定している。

第5 【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に準拠して作成し、「建設業法施行規則」（昭和24年建設省令第14号）に準じて記載している。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号）第2条の規定に基づき、同規則及び「建設業法施行規則」（昭和24年建設省令第14号）により作成している。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）及び事業年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）の連結財務諸表及び財務諸表について、新日本有限責任監査法人により監査を受けている。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、以下のとおり連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っている。

- ①会計基準等の内容を適切に把握できる体制を確保するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入している。
- ②会計基準設定主体等の行う研修へ積極的に参加している。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (平成30年 3 月31日)
資産の部		
流動資産		
現金預金	※ 4 30,314	※ 4 35,189
受取手形・完成工事未収入金等	106,204	※ 8 127,610
有価証券	1	26
未成工事支出金	6,679	6,826
商品	687	897
材料貯蔵品	4,108	5,444
繰延税金資産	3,415	3,755
その他	※ 4 6,766	※ 4 2,906
貸倒引当金	△6	△17
流動資産合計	158,172	182,640
固定資産		
有形固定資産		
建物・構築物	※ 3, ※ 4 64,920	※ 3, ※ 4 65,757
機械、運搬具及び工具器具備品	※ 3, ※ 4 35,305	※ 3, ※ 4 39,515
土地	28,385	※ 4 28,484
リース資産	5,999	6,345
建設仮勘定	4,604	1,718
減価償却累計額	△53,453	△56,657
有形固定資産合計	85,762	85,164
無形固定資産		
のれん	1,175	500
その他	975	943
無形固定資産合計	2,150	1,443
投資その他の資産		
投資有価証券	※ 1, ※ 2, ※ 4 46,847	※ 1, ※ 2, ※ 4 48,625
長期貸付金	※ 4 576	※ 4 932
退職給付に係る資産	241	353
繰延税金資産	3,401	2,433
その他	※ 1, ※ 4 4,218	※ 1, ※ 4 4,678
貸倒引当金	△892	△1,119
投資その他の資産合計	54,393	55,905
固定資産合計	142,306	142,513
資産合計	300,478	325,153

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年 3 月31 日)	当連結会計年度 (平成30年 3 月31 日)
負債の部		
流動負債		
支払手形・工事未払金等	80,636	※8 98,738
短期借入金	※4 21,387	※4 7,584
未払法人税等	6,083	6,239
未成工事受入金	9,611	6,918
工事損失引当金	207	-
その他	6,818	10,744
流動負債合計	124,745	130,226
固定負債		
転換社債型新株予約権付社債	1,860	-
長期借入金	※4 9,707	※4 8,983
リース債務	2,322	2,597
役員退職慰労引当金	233	406
退職給付に係る負債	17,471	15,746
その他	2,634	3,053
固定負債合計	34,230	30,787
負債合計	158,975	161,014
純資産の部		
株主資本		
資本金	11,632	12,555
資本剰余金	11,907	12,853
利益剰余金	119,700	139,809
自己株式	△8	△8
株主資本合計	143,232	165,209
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	3,097	4,261
繰延ヘッジ損益	△185	△570
為替換算調整勘定	167	306
退職給付に係る調整累計額	△6,430	△7,757
その他の包括利益累計額合計	△3,351	△3,759
非支配株主持分	1,622	2,689
純資産合計	141,503	164,139
負債純資産合計	300,478	325,153

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)
売上高		
完成工事高	※ 1 328,915	※ 1 346,403
その他の事業売上高	12,855	14,468
売上高合計	341,771	360,872
売上原価		
完成工事原価	※ 2, ※ 4 279,412	※ 2, ※ 4 292,664
その他の事業売上原価	10,407	11,547
売上原価合計	289,820	304,212
売上総利益		
完成工事総利益	49,503	53,738
その他の事業総利益	2,448	2,921
売上総利益合計	51,951	56,659
販売費及び一般管理費	※ 3, ※ 4 21,219	※ 3, ※ 4 21,932
営業利益	30,732	34,726
営業外収益		
受取利息	80	83
受取配当金	783	564
持分法による投資利益	6	310
投資事業組合運用益	188	641
受取賃貸料	328	326
受取保険金及び配当金	396	606
その他	455	895
営業外収益合計	2,239	3,427
営業外費用		
支払利息	397	411
為替差損	73	-
割増退職金	41	88
関係会社貸倒引当金繰入額	121	151
その他	151	161
営業外費用合計	784	812
経常利益	32,187	37,342

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)
特別利益		
固定資産売却益	※ 5 50	※ 5 516
投資有価証券売却益	37	263
負ののれん発生益	-	183
関係会社清算益	-	0
特別利益合計	88	965
特別損失		
減損損失	-	※ 7 831
固定資産処分損	※ 6 142	※ 6 318
投資有価証券評価損	96	7
子会社株式売却損	42	-
施設利用権評価損	-	1
特別損失合計	280	1,158
税金等調整前当期純利益	31,995	37,148
法人税、住民税及び事業税	9,650	10,856
法人税等調整額	41	789
法人税等合計	9,691	11,645
当期純利益	22,303	25,502
非支配株主に帰属する当期純利益	5	206
親会社株主に帰属する当期純利益	22,297	25,296

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)
当期純利益	22,303	25,502
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	964	1,161
繰延ヘッジ損益	31	△172
為替換算調整勘定	△190	153
退職給付に係る調整額	954	△1,327
持分法適用会社に対する持分相当額	23	△211
その他の包括利益合計	※ 1 1,783	※ 1 △396
包括利益	24,086	25,106
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	24,128	24,888
非支配株主に係る包括利益	△42	218

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	7,901	7,891	101,173	△611	116,355
当期変動額					
新株の発行	3,730	3,726			7,457
剰余金の配当			△3,742		△3,742
親会社株主に帰属する 当期純利益			22,297		22,297
持分法適用関連会社増 加に伴う増加額			—		—
自己株式の取得				△4	△4
自己株式の処分		71		608	680
合併による増加			4		4
連結子会社株式の取得 による持分の増減		217			217
決算期の変更に伴う子 会社剰余金の増加高			—		—
決算期の変更に伴う子 会社剰余金の減少高			△32		△32
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	3,730	4,015	18,527	603	26,877
当期末残高	11,632	11,907	119,700	△8	143,232

	その他の包括利益累計額					非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	為替換算 調整勘定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利 益累計額合計		
当期首残高	2,117	△234	319	△7,384	△5,182	2,026	113,199
当期変動額							
新株の発行							7,457
剰余金の配当							△3,742
親会社株主に帰属する 当期純利益							22,297
持分法適用関連会社増 加に伴う増加額							—
自己株式の取得							△4
自己株式の処分							680
合併による増加							4
連結子会社株式の取得 による持分の増減							217
決算期の変更に伴う子 会社剰余金の増加高							—
決算期の変更に伴う子 会社剰余金の減少高							△32
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	979	49	△152	954	1,830	△404	1,426
当期変動額合計	979	49	△152	954	1,830	△404	28,303
当期末残高	3,097	△185	167	△6,430	△3,351	1,622	141,503

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	11,632	11,907	119,700	△8	143,232
当期変動額					
新株の発行	922	921			1,844
剰余金の配当			△5,645		△5,645
親会社株主に帰属する 当期純利益			25,296		25,296
持分法適用関連会社増 加に伴う増加額			446		446
自己株式の取得				△7	△7
自己株式の処分		△4		7	3
合併による増加			—		—
連結子会社株式の取得 による持分の増減		28			28
決算期の変更に伴う子 会社剰余金の増加高			10		10
決算期の変更に伴う子 会社剰余金の減少高			—		—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	922	945	20,108	△0	21,976
当期末残高	12,555	12,853	139,809	△8	165,209

	その他の包括利益累計額					非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	為替換算 調整勘定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利 益累計額合計		
当期首残高	3,097	△185	167	△6,430	△3,351	1,622	141,503
当期変動額							
新株の発行							1,844
剰余金の配当							△5,645
親会社株主に帰属する 当期純利益							25,296
持分法適用関連会社増 加に伴う増加額							446
自己株式の取得							△7
自己株式の処分							3
合併による増加							—
連結子会社株式の取得 による持分の増減							28
決算期の変更に伴う子 会社剰余金の増加高							10
決算期の変更に伴う子 会社剰余金の減少高							—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	1,164	△384	139	△1,327	△407	1,067	659
当期変動額合計	1,164	△384	139	△1,327	△407	1,067	22,635
当期末残高	4,261	△570	306	△7,757	△3,759	2,689	164,139

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	31,995	37,148
減価償却費	5,449	5,512
減損損失	-	831
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	142	107
退職給付に係る負債及び役員退職慰労引当金の増減額 (△は減少)	△2,448	△3,634
工事損失引当金の増減額 (△は減少)	154	△214
施設利用権評価損	-	1
投資事業組合運用損益 (△は益)	△188	△641
受取利息及び受取配当金	△864	△648
支払利息	397	411
為替差損益 (△は益)	40	△35
持分法による投資損益 (△は益)	△6	△310
有形固定資産売却損益 (△は益)	△46	△509
有形固定資産除却損	88	204
有価証券及び投資有価証券評価損益 (△は益)	96	7
有価証券及び投資有価証券売却損益 (△は益)	△37	△263
子会社株式売却損益 (△は益)	42	-
負ののれん発生益	-	△183
関係会社清算損益 (△は益)	-	△0
売上債権の増減額 (△は増加)	△15,156	△17,939
未成工事支出金の増減額 (△は増加)	△304	76
たな卸資産の増減額 (△は増加)	△3,539	△1,500
仕入債務の増減額 (△は減少)	12,147	15,598
未成工事受入金の増減額 (△は減少)	△254	△3,098
長期未払金の増減額 (△は減少)	10	9
未払又は未収消費税等の増減額	△5,281	3,594
その他	1,677	5,711
小計	24,112	40,235
利息及び配当金の受取額	864	629
利息の支払額	△397	△398
法人税等の支払額	△10,392	△10,562
営業活動によるキャッシュ・フロー	14,187	29,903

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	△671	△406
定期預金の払戻による収入	2,680	168
有形固定資産の取得による支出	△6,381	△4,092
有形固定資産の売却による収入	145	710
投資有価証券の取得による支出	△14,059	△3,278
投資有価証券の売却による収入	503	3,140
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出	-	△168
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による収入	21	-
長期貸付けによる支出	△322	△929
長期貸付金の回収による収入	345	92
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の売却による収入	115	-
その他	△328	1,046
投資活動によるキャッシュ・フロー	△17,951	△3,717
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額（△は減少）	14,450	△14,872
長期借入れによる収入	42	6,187
長期借入金の返済による支出	△2,561	△6,549
自己株式の取得による支出	△4	△7
配当金の支払額	△3,732	△5,635
非支配株主への配当金の支払額	△103	△1
非支配株主への払戻による支出	△22	△20
連結の範囲の変更を伴わない子会社株式の取得による支出	△29	△1
その他	△839	△881
財務活動によるキャッシュ・フロー	7,200	△21,783
現金及び現金同等物に係る換算差額	△92	84
現金及び現金同等物の増減額（△は減少）	3,344	4,486
現金及び現金同等物の期首残高	26,732	30,027
連結子会社の決算期の変更に伴う期首現金及び現金同等物の増減額（△は減少）	△56	△9
非連結子会社との合併に伴う現金及び現金同等物の増加額	7	-
現金及び現金同等物の期末残高	※1 30,027	※1 34,505

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社数 48社 (前連結会計年度 43社)

主要な連結子会社名

(株)福岡電設、(株)きたせつ、(株)大分電設、(株)明光社、(株)南九州電設、(株)熊栄電設、(株)チョーエイ、(株)有明電設、九興総合設備(株)、エルゴテック(株)、九州電工ホーム(株)、(株)Q-mast、九電工新エネルギー(株)、ASIA PROJECTS ENGINEERING PTE. LTD.

平成29年4月1日に、連結子会社である(株)昭電社は、(株)Q-mastに名称を変更している。

平成29年7月31日に、佐賀県に所在する(株)陣内工務店の株式を取得し、連結子会社としている。

平成30年1月23日に、福島県に所在する三友電設(株)の株式を取得し、連結子会社としている。

平成30年2月14日に、連結子会社である(株)オートメーション・テクノロジーが、鹿児島県に所在する(株)システックの株式を取得し、連結子会社としている。

平成30年3月19日に、神奈川県に所在するエルゴテック(株)の株式の一部を取得し、その子会社の茨城県に所在する清和工業(株)とともに連結子会社としている。

(2) 主要な非連結子会社名

(株)伊都コミュニティサービス

非連結子会社10社は、いずれも小規模会社であり、合計の総資産、売上高、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等は、いずれも重要性が乏しいため、連結の範囲から除いている。

2 持分法の適用に関する事項

非連結子会社と関連会社に対する投資額については、小規模会社を除き、持分法を適用している。

(1) 持分法適用会社数

関連会社 7社 (前連結会計年度 6社)

平成29年6月15日に、リース事業を行う(株)キューコーリースの株式を追加取得し、持分法適用の関連会社としている。

(2) 持分法適用の主要な関連会社名

(株)九建

(3) 持分法非適用の主要な非連結子会社名

(株)伊都コミュニティサービス

(4) 持分法非適用の主要な関連会社名

西枝工業(株)

持分法非適用の非連結子会社及び関連会社は、それぞれ当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等に及ぼす影響が軽微であり、かつ全体としても重要性がないため、持分法の適用から除外している。

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社である九連環境開発股份有限公司、ASIA PROJECTS ENGINEERING PTE. LTD. 及びKYUDENKO SOUTH EAST ASIA PTE. LTD. の決算日は12月31日、三友電設(株)の決算日は1月31日である。連結財務諸表の作成に当たってはそれぞれの決算日現在の財務諸表を使用している。

連結子会社である(株)陣内工務店の決算日は5月31日である。連結財務諸表の作成に当たっては2月28日現在で実施した仮決算に基づく財務諸表を使用している。

なお、それぞれの決算日と連結決算日3月31日までの期間に発生した重要な取引については、連結上必要な調整を行っている。

上記以外の連結子会社の事業年度は、連結財務諸表提出会社と同一である。

4 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

① その他有価証券

a 時価のあるもの

連結決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

なお、組込デリバティブを区分して測定することができない複合金融商品は、複合金融商品全体を時価評価し、評価差額を当連結会計年度の損益に計上している。

b 時価のないもの

移動平均法による原価法

なお、投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資(金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるもの)については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書を基礎とし、持分相当額を純額で取り込む方法によっている。

たな卸資産

① 未成工事支出金

個別法による原価法

② 商品、材料貯蔵品

主として総平均法による原価法

(貸借対照表価額は、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

(2) 重要な減価償却資産の減価償却方法

① 有形固定資産(リース資産を除く)

主として建物(建物附属設備を含む)については定額法、建物以外については定率法によっている。

ただし、平成28年4月1日以降に取得した構築物並びに同日以降に取得した国内連結子会社の建物附属設備については定額法を採用している。

なお、当社及び国内連結子会社における耐用年数及び残存価額については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっている。

② 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法によっている。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法を採用している。

③ リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっている。

(3) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

売上債権、貸付金等の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上している。

② 投資損失引当金

投資に対する損失への対応を図るため、財務健全性の観点から、必要額を計上している。

なお、投資損失引当金は、当該資産の金額から直接控除している。

③ 工事損失引当金

受注工事の損失発生に備えるため、当連結会計年度末手持工事のうち、損失の発生が見込まれ、かつ金額を合理的に見積もることのできる工事について、その損失見込額を計上している。

なお、当連結会計年度末においては、損失の発生が見込まれる工事契約がないため、工事損失引当金は計上していない。

④ 役員退職慰労引当金

連結子会社は、役員の退職慰労金の支給に備えるため、役員退職慰労金内規により計算した支給基準額を計上している。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

①退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっている。

②数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用については、その発生時における従業員の平均残存勤務期間の年数による定額法により按分した額を発生時から費用処理している。

数理計算上の差異については、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間の年数による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理している。

③小規模企業等における簡便法の採用

全ての連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、主として退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用している。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

完成工事高及び完成工事原価の計上基準

当連結会計年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事については工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を適用し、その他の工事については、工事完成基準を適用している。

(6) ヘッジ会計の方法

①ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理による。なお、一体処理（特例処理、振当処理）の要件を満たす金利通貨スワップについては一体処理、振当処理の要件を満たす為替予約については振当処理を採用している。

②ヘッジ手段とヘッジ対象

a. ヘッジ手段・・・金利スワップ

ヘッジ対象・・・借入金利息

b. ヘッジ手段・・・金利通貨スワップ

ヘッジ対象・・・外貨建借入金及び外貨建借入金利息

c. ヘッジ手段・・・為替予約

ヘッジ対象・・・外貨建予定取引

③ヘッジ方針

当社グループは、外貨建取引の為替相場の変動リスクを回避する目的で為替予約取引を行い、金融機関からの借入金の一部について、金利変動によるリスクを回避するため、金利スワップ取引を利用している。また、金融機関からの外貨建借入金のすべてについて、為替及び金利変動によるリスクを回避するため、金利通貨スワップを利用している。なお、投機目的のデリバティブ取引は行わない方針である。

④ヘッジ有効性評価の方法

当社グループは、ヘッジ手段とヘッジ対象に関する重要な条件が一致している場合は、ヘッジ有効性の判定を省略している。なお、一体処理の要件を満たす金利通貨スワップについては、有効性の判定を省略している。また、為替予約については将来の取引予定に基づくものであり、実行の可能性が極めて高いため、有効性の判定を省略している。

(7) のれんの償却方法及び償却期間

のれんについては、個別案件ごとに判断し、合理的な年数で均等償却を行っている。

(8) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなる。

(9) その他連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項

①消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税に相当する額の会計処理は、税抜方式によっており、資産に係る控除対象外消費税及び地方消費税は当連結会計年度の費用として処理している。

②重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理している。

なお、在外子会社等の資産、負債、収益及び費用は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定及び非支配株主持分に含めている。

(未適用の会計基準等)

- ・「税効果会計に係る会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第28号 平成30年2月16日)
- ・「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第26号 平成30年2月16日)

(1) 概要

個別財務諸表における子会社株式等に係る将来加算一時差異の取扱いが見直され、また(分類1)に該当する企業における繰延税金資産の回収可能性に関する取扱いの明確化が行われている。

(2) 適用予定日

平成31年3月期の期首より適用予定である。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中である。

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 平成30年3月30日)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日)

(1) 概要

収益認識に関する包括的な会計基準である。収益は、次の5つのステップを適用し認識される。

ステップ1: 顧客との契約を識別する。

ステップ2: 契約における履行義務を識別する。

ステップ3: 取引価格を算定する。

ステップ4: 契約における履行義務に取引価格を配分する。

ステップ5: 履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。

(2) 適用予定日

平成34年3月期の期首より適用予定である。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中である。

(表示方法の変更)

(連結損益計算書関係)

前連結会計年度において、「営業外収益」の「その他」に含めて表示していた「投資事業組合運用益」は、金額的重要性が増したため、当連結会計年度において区分掲記している。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っている。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、「営業外収益」の「その他」に表示していた6億44百万円は、「投資事業組合運用益」1億88百万円、「その他」4億55百万円として組替えている。

前連結会計年度において、区分掲記していた「営業外費用」の「貸倒引当金繰入額」は、金額的重要性が乏しくなったため、当連結会計年度より「その他」に含めて表示している。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っている。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、「営業外費用」に表示していた「貸倒引当金繰入額」92百万円、「その他」59百万円は、「その他」1億51百万円として組替えている。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

前連結会計年度において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に含めて表示していた「投資事業組合運用損益(△は益)」は、金額的重要性が増したため、当連結会計年度において区分掲記している。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っている。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に表示していた14億88百万円は、「投資事業組合運用損益(△は益)」△1億88百万円、「その他」16億77百万円として組替えている。

(連結貸借対照表関係)

※1 このうち非連結子会社及び関連会社に対する金額は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
投資有価証券	9,587百万円	10,620百万円
投資その他の資産その他(出資金)	50百万円	50百万円

※2 資産の金額から直接控除している投資損失引当金の額

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
投資有価証券	201百万円	76百万円

※3 圧縮記帳額

国庫補助金等により有形固定資産の取得価額から控除している圧縮記帳額及びその内訳は、以下のとおりである。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
圧縮記帳額		
（うち、構築物）	283百万円	283百万円
（うち、機械装置）	2,809百万円	2,809百万円

※4 当社が出資しているPFI事業及び再生可能エネルギー発電事業に関する事業会社の借入債務に対して、担保を提供しており、担保に供している資産及び担保に係る債務は次のとおりである。

(1) 担保に供している資産

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
現金預金	281百万円	418百万円
流動資産その他(短期貸付金)	1,309百万円	15百万円
建物・構築物	8百万円	6百万円
機械、運搬具及び工具器具備品	1,441百万円	1,271百万円
土地	1百万円	0百万円
投資有価証券	7,212百万円	6,826百万円
長期貸付金	92百万円	77百万円
投資その他の資産その他(敷金)	15百万円	15百万円
計	10,361百万円	8,631百万円

(2) 担保に係る債務

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
短期借入金	137百万円	1,399百万円
長期借入金	1,991百万円	1,792百万円
計	2,128百万円	3,191百万円

5 偶発債務については、次のとおり債務の保証を行っている。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
(1) 株式会社みずほ銀行		
渥美グリーンパワー(株)		
借入保証	465百万円	378百万円
(2) 株式会社日本政策投資銀行		
長島ウインドヒル(株)		
借入保証	245百万円	217百万円
(3) 株式会社北陸銀行 他3行		
松島風力(株)		
借入保証	100百万円	880百万円
計	711百万円	1,475百万円

6 受取手形割引高及び受取手形裏書譲渡高

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
受取手形割引高	30百万円	413百万円
受取手形裏書譲渡高	6百万円	2百万円

7 (当社貸手側)

当社は、PFI事業会社への協調融資における劣後貸出人として劣後貸付契約を締結している。
前連結会計年度末における対象会社数は9社であり、当連結会計年度末における対象会社数は10社である。
当連結会計年度末における貸出コミットメントに係る貸出未実行残高は次のとおりである。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
貸出コミットメントの総額	146百万円	155百万円
貸出実行残高	100百万円	100百万円
差引額	146百万円	155百万円

※8 連結会計年度末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理している。

なお、当連結会計年度末日が金融機関の休日であったため、次の連結会計年度末日満期手形が、連結会計年度末残高に含まれている。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
受取手形	100百万円	443百万円
支払手形	100百万円	4,856百万円

(連結損益計算書関係)

※1 工事進行基準による完成工事高は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
	166,115百万円	180,913百万円

※2 完成工事原価に含まれる工事損失引当金の繰入額(△は戻入額)は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
	154百万円	△214百万円

※3 このうち主要な費目及び金額は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
従業員給料手当	8,735百万円	9,200百万円
退職給付費用	614百万円	362百万円
役員退職慰労引当金繰入額	59百万円	51百万円
減価償却費	859百万円	948百万円

※4 研究開発費

一般管理費及び当期完成工事原価に含まれる研究開発費の総額は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
	235百万円	286百万円

※5 固定資産売却益の内訳は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
建物・構築物	2百万円	1百万円
機械、運搬具及び工具器具備品	1百万円	2百万円
土地	44百万円	513百万円
リース資産	1百万円	―百万円
投資その他の資産その他	0百万円	―百万円
計	50百万円	516百万円

※6 固定資産処分損の内訳は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
建物・構築物	124百万円	294百万円
機械、運搬具及び工具器具備品	7百万円	8百万円
土地	―百万円	10百万円
リース資産	2百万円	1百万円
無形固定資産その他	1百万円	0百万円
投資その他の資産その他	5百万円	3百万円
計	142百万円	318百万円

※ 7 減損損失

当社グループは、事業用資産については管理会計上の区分を基準に主として支店単位及び連結グループ会社単位に、賃貸用資産及び遊休資産については個別にグループ化し、減損損失の判定を行っている。

当社グループは、以下の資産グループについて減損損失を計上した。

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

該当事項なし。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

用途	種類	場所	減損損失
—	のれん	シンガポール共和国	831百万円

上記の減損損失は、ASIA PROJECTS ENGINEERING PTE. LTD. を買収した際に計上したのれんについて、収益性の低下により、当該のれんの帳簿価額全額831百万円を減損損失として特別損失に計上している。

なお、回収可能価額は、使用価値により測定しており、将来キャッシュ・フローを7.0%で割引いて算定している。

(連結包括利益計算書関係)

※ 1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	1,403百万円	1,949百万円
組替調整額	△27百万円	△253百万円
税効果調整前	1,376百万円	1,695百万円
税効果額	△412百万円	△533百万円
その他有価証券評価差額金	964百万円	1,161百万円
繰延ヘッジ損益		
当期発生額	44百万円	△248百万円
組替調整額	一百万円	一百万円
税効果調整前	44百万円	△248百万円
税効果額	△13百万円	75百万円
繰延ヘッジ損益	31百万円	△172百万円
為替換算調整勘定		
当期発生額	△190百万円	153百万円
退職給付に係る調整額		
当期発生額	156百万円	△1,745百万円
組替調整額	1,248百万円	△160百万円
税効果調整前	1,404百万円	△1,905百万円
税効果額	△450百万円	578百万円
退職給付に係る調整額	954百万円	△1,327百万円
持分法適用会社に対する持分相当額		
当期発生額	23百万円	△211百万円
その他の包括利益合計	1,783百万円	△396百万円

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	66,039,535	4,095,436	—	70,134,971

(変動事由の概要)

増加数の主な内訳は、次のとおりである。

新株の発行(新株予約権の行使)

第2回無担保転換社債型新株予約権付社債の新株予約権の権利行使による増加 4,095,436株

2 自己株式の種類及び株式数に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	391,045	1,342	373,446	18,941

(変動事由の概要)

増加数及び減少数の主な内訳は、次のとおりである。

単元未満株式の買取りによる増加 1,342株

第2回無担保転換社債型新株予約権付社債の新株予約権の権利行使による減少 373,446株

3 新株予約権等に関する事項

区分	内訳	目的となる株式の種類	目的となる株式の数(株)				当連結会計年度末残高(百万円)
			当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末	
提出会社	第2回無担保転換社債型新株予約権付社債	普通株式	5,456,877	33,533	4,468,882	1,021,528	(注)3
合計			5,456,877	33,533	4,468,882	1,021,528	—

(注)1 目的となる株式の数は、新株予約権が権利行使されるものと仮定した場合における株式数を記載している。

2 目的となる株式数の変動事由の概要

第2回無担保転換社債型新株予約権付社債の新株予約権の増加は、転換価額の調整によるものであり、減少は新株予約権の権利行使によるものである。

3 一括法を採用している。

4 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
平成28年4月28日 取締役会	普通株式	1,641	25	平成28年3月31日	平成28年6月7日
平成28年10月28日 取締役会	普通株式	2,101	30	平成28年9月30日	平成28年12月1日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
平成29年4月28日 取締役会	普通株式	利益剰余金	2,805	40	平成29年3月31日	平成29年6月6日

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	70,134,971	1,023,539	—	71,158,510

(変動事由の概要)

増加数の主な内訳は、次のとおりである。

新株の発行(新株予約権の行使)

第2回無担保転換社債型新株予約権付社債の新株予約権の権利行使による増加 1,023,539株

2 自己株式の種類及び株式数に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	18,941	1,615	1,665	18,891

(変動事由の概要)

増加数及び減少数の主な内訳は、次のとおりである。

単元未満株式の買取りによる増加 1,615株

第2回無担保転換社債型新株予約権付社債の新株予約権の権利行使による減少 1,665株

3 新株予約権等に関する事項

区分	内訳	目的となる株式の種類	目的となる株式の数(株)				当連結会計年度末残高(百万円)
			当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末	
提出会社	第2回無担保転換社債型新株予約権付社債	普通株式	1,021,528	10,892	1,025,204	7,216	(注)3
合計			1,021,528	10,892	1,025,204	7,216	—

(注)1 目的となる株式の数は、新株予約権が権利行使されるものと仮定した場合における株式数を記載している。

2 目的となる株式数の変動事由の概要

第2回無担保転換社債型新株予約権付社債の新株予約権の増加は、転換価額の調整によるものであり、減少は新株予約権の権利行使によるものである。

3 一括法を採用している。

4 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
平成29年4月28日 取締役会	普通株式	2,805	40	平成29年3月31日	平成29年6月6日
平成29年10月27日 取締役会	普通株式	2,839	40	平成29年9月30日	平成29年12月1日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
平成30年4月27日 取締役会	普通株式	利益剰余金	3,557	50	平成30年3月31日	平成30年6月6日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
現金預金勘定	30,314百万円	35,189百万円
預入期間が3か月を超える 定期預金	△287百万円	△668百万円
短期借入金	一百万円	△16百万円
現金及び現金同等物	30,027百万円	34,505百万円

2 重要な非資金取引の内容

(1) ファイナンス・リース取引に係る資産及び債務の額

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
ファイナンス・リース取引に係る 資産及び債務額	1,162百万円	1,153百万円

(2) 重要な資産除去債務の計上額

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
重要な資産除去債務の計上額	86百万円	111百万円

(3) 転換社債型新株予約権付社債における新株予約権の権利行使

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
新株予約権の権利行使による自己 株式処分差益	71百万円	△4百万円
新株予約権の権利行使による資本 金増加額	3,730百万円	922百万円
新株予約権の権利行使による資本 準備金増加額	3,726百万円	921百万円
新株予約権の権利行使による自己 株式の減少額	608百万円	7百万円
新株予約権の権利行使による転換 社債型新株予約権付社債の減少額	8,137百万円	1,847百万円

(リース取引関係)

ファイナンス・リース取引(借主側)

所有権移転外ファイナンス・リース取引

1 リース資産の内容

有形固定資産

主として、設備工事業における工事用車両(機械、運搬具及び工具器具備品)である。

2 リース資産の減価償却の方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっている。

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については、一時的な余剰資金を安全性の高い金融資産で運用し、また短期的な運転資金や営業資産の購入資金を銀行等金融機関からの借入により調達している。

デリバティブ取引は、余剰資金の運用を目的として、安全性が高いと判断された複合金融商品を利用し、また、将来の金利・為替変動によるリスク回避を目的とし、投機的な取引は行わない方針である。

また、取得については、都度、決裁権限規程に基づき判断されている。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である受取手形・完成工事未収入金等は、顧客の信用リスクに晒されている。当該リスクに関しては、取引先ごとの期日管理及び残高管理を行うとともに、財務状況等の悪化による回収懸念の早期把握や軽減を図っている。

投資有価証券は主として株式であり、市場価格の変動リスクに晒されているが、定期的に時価や発行体（取引企業）の財務状況を把握している。

営業債務である支払手形・工事未払金等は、そのほとんどが1年以内の支払期日である。

短期借入金は、営業取引に係る資金調達を目的としたものである。

長期借入金は、投資に係る資金調達を目的としたものである。

営業債務や借入金は流動性リスクに晒されているが、当社グループでは、各社が月次での資金繰計画の作成などにより管理している。また、金融機関からの借入金の一部については、金利変動によるリスクを回避するため、金利スワップ取引を利用し、金融機関からの外貨建借入金のすべてについては、為替及び金利変動によるリスクを回避するため、金利通貨スワップを利用している。また、外貨建予定取引の一部については、為替相場の変動リスクを回避する目的で為替予約取引を行っている。なお、ヘッジ取引については、都度、内規に基づき判断されている。

(3) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれている。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することもある。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりである。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含めていない((注2)参照)。

前連結会計年度（平成29年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金預金	30,314	30,314	—
(2) 受取手形・完成工事未収入金等 貸倒引当金(※1)	106,204 △6		
	106,198	106,198	—
(3) 投資有価証券 その他有価証券	20,897	20,897	—
資産計	157,410	157,410	—
(1) 支払手形・工事未払金等	80,636	80,636	—
(2) 転換社債型新株予約権付社債	1,860	2,978	1,118
(3) 長期借入金(※2)	16,255	16,291	35
負債計	98,752	99,906	1,154
デリバティブ取引(※3)	(80)	(80)	—

(※1) 受取手形・完成工事未収入金等に係る貸倒引当金を控除している。

(※2) 短期借入金に含まれる1年内返済予定の長期借入金は、長期借入金に含めている。

(※3) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示し、合計で正味の債務となる項目については()で示している。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金預金	35,189	35,189	—
(2) 受取手形・完成工事未収入金等 貸倒引当金(※1)	127,610 △17		
	127,593	127,593	—
(3) 投資有価証券 その他有価証券	22,756	22,756	—
資産計	185,539	185,539	—
(1) 支払手形・工事未払金等	98,738	98,738	—
(2) 長期借入金(※2)	16,168	16,142	△25
負債計	114,907	114,881	△25
デリバティブ取引(※3)	(329)	(329)	—

(※1) 受取手形・完成工事未収入金等に係る貸倒引当金を控除している。

(※2) 短期借入金に含まれる1年内返済予定の長期借入金は、長期借入金に含めている。

(※3) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示し、合計で正味の債務となる項目については()で示している。

(表示方法の変更)

転換社債型新株予約権付社債は、金額的重要性が乏しくなったため、当連結会計年度より記載を省略している。

(注1)金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資 産

(1) 現金預金

これらは短期で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっている。

(2) 受取手形・完成工事未収入金等

これらのうち短期で決済されるものについて、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっている。

(3) 投資有価証券

投資有価証券の時価について、株式は取引所の価格によっており、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっている。また、投資信託については、公表されている基準価格によっている。

負 債

(1) 支払手形・工事未払金等

これらは短期で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっている。

(2) 長期借入金

長期借入金の時価については、元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっている。

デリバティブ取引

デリバティブ取引の時価については、取引金融機関から提示された価格によっている。

なお、一体処理による金利通貨スワップ及び振当処理による為替予約については、ヘッジ対象と一体として処理している。

(注2)時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額

(単位：百万円)

区分	平成29年3月31日	平成30年3月31日
非上場株式等	25,950	25,869

上記については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められるため、「(3)投資有価証券」には含めていない。

(注3)金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度（平成29年3月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
預金	30,237	—	—	—
受取手形・完成工事未収入金等	106,204	—	—	—
有価証券及び投資有価証券				
その他有価証券のうち満期があるもの(債券)	3	1,000	1,832	392
その他有価証券のうち満期があるもの(その他)	—	207	—	12,490
合計	136,445	1,207	1,832	12,882

当連結会計年度（平成30年3月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
預金	35,124	—	—	—
受取手形・完成工事未収入金等	127,610	—	—	—
有価証券及び投資有価証券				
その他有価証券のうち満期があるもの(債券)	—	2,006	825	253
その他有価証券のうち満期があるもの(その他)	40	231	—	11,310
合計	162,775	2,237	825	11,563

(注4)長期借入金の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度（平成29年3月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
長期借入金	6,548	5,870	577	577	577	2,104
転換社債型新株予約権付社債	—	1,860	—	—	—	—

当連結会計年度（平成30年3月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
長期借入金	7,184	686	611	591	5,591	1,503
転換社債型新株予約権付社債	13	—	—	—	—	—

(有価証券関係)

1 満期保有目的の債券

前連結会計年度(平成29年3月31日)

該当なし。

当連結会計年度(平成30年3月31日)

該当なし。

2 その他有価証券

前連結会計年度(平成29年3月31日)

区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの			
株式	16,509	11,917	4,592
債券			
社債	1,002	1,000	2
その他	119	88	30
その他	214	122	91
小計	17,845	13,128	4,717
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
株式	863	1,152	△288
債券			
社債	1,804	1,836	△32
その他	216	222	△6
その他	169	169	△0
小計	3,053	3,380	△327
合計	20,899	16,509	4,389

当連結会計年度(平成30年3月31日)

区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの			
株式	18,132	11,607	6,525
債券			
社債			
その他	123	88	34
その他	189	106	82
小計	18,445	11,802	6,643
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
株式	1,347	1,691	△343
債券			
社債	2,836	2,886	△50
その他	118	120	△2
その他	36	50	△13
小計	4,338	4,749	△411
合計	22,783	16,551	6,231

3 当連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

区分	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	16	10	—
債券			
国債・地方債等	—	—	—
社債	368	18	—
その他	—	—	—
その他	119	8	—
合計	504	37	—

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

区分	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	546	227	—
債券			
国債・地方債等	—	—	—
社債	—	—	—
その他	—	—	—
その他	45	36	—
合計	591	263	—

4 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

有価証券について96百万円（その他有価証券）減損処理を行っている。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

有価証券について7百万円（その他有価証券）減損処理を行っている。

なお、減損にあたっては、期末時における時価が、取得原価の30%以上下落したものを「著しく下落した」ものとしており、原則として50%程度以上下落したものについては、回復する見込みがないものとして減損処理を行っている。また、30%以上50%未満下落したものについては、回復可能性の判定を行い、減損処理の要否を決定している。さらに、時価のない株式については、発行会社の財政状態の悪化により実質価額が「著しく低下した」ときは、回復可能性の判定を行い、減損処理の要否を決定している。

(デリバティブ取引関係)

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1) 通貨関連

前連結会計年度(平成29年3月31日)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)
為替予約の 振当処理	為替予約取引 買建 米ドル	外貨建予定取引	6,984	6,573	△80 (注)

(注) 時価の算定方法については、取引先金融機関から提示された価格等に基づき算定している。

当連結会計年度(平成30年3月31日)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)
為替予約の 振当処理	為替予約取引 買建 米ドル	外貨建予定取引	6,573	3,393	△329 (注)

(注) 時価の算定方法については、取引先金融機関から提示された価格等に基づき算定している。

(2) 金利関連

前連結会計年度(平成29年3月31日)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 支払固定・ 受取変動	長期借入金	5,000	—	(注) 1
金利スワップの原則的処理	金利スワップ取引 支払固定・ 受取変動	長期借入金	2,759	2,593	△129 (注) 2・3
金利通貨スワップの一体処理(特例処理・振当処理)	金利通貨スワップ取引 支払固定・ 受取変動 支払円・ 受取米ドル	長期借入金	1,757	1,506	(注) 1

(注) 1 金利スワップの特例処理及び金利通貨スワップの一体処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載している。

2 持分法適用会社で実施している長期借入金に対する金利スワップによるものである。契約額及び時価については、当社持分相当額を乗じて算出している。

3 時価の算定方法については、取引先金融機関から提示された価格等に基づき算定している。

当連結会計年度(平成30年3月31日)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)
金利スワップの原則的処理	金利スワップ取引 支払固定・ 受取変動	長期借入金	4,137	3,982	△341 (注) 1・2
金利通貨スワップの一体処理(特例処理・振当処理)	金利通貨スワップ取引 支払固定・ 受取変動 支払円・ 受取米ドル	長期借入金	1,506	1,255	(注) 3

(注) 1 持分法適用会社で実施している長期借入金に対する金利スワップによるものである。契約額及び時価については、当社持分相当額を乗じて算出している。

2 時価の算定方法については、取引先金融機関から提示された価格等に基づき算定している。

3 金利通貨スワップの一体処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載している。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社は、確定給付型の確定給付企業年金制度、確定拠出型の確定拠出年金制度及び退職一時金制度を設けており、連結子会社は、確定給付型の制度として、複数事業主制度の確定給付企業年金制度及び退職一時金制度を設けている。

また、当社及び連結子会社は、従業員の退職等に際して割増退職金を支払う場合がある。

なお、主として連結子会社が有する確定給付企業年金制度及び退職一時金制度は、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算している。

さらに、一部の連結子会社は、複数事業主制度の厚生年金基金制度に加入しており、自社の拠出に対応する年金資産の額を合理的に計算することができない制度については、確定拠出制度と同様に会計処理している。

2. 確定給付制度（簡便法を適用した制度を除く。）

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度		当連結会計年度	
	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
退職給付債務の期首残高	45,636		44,233	
勤務費用	1,845		1,855	
利息費用	273		309	
数理計算上の差異の発生額	84		100	
退職給付の支払額	△3,607		△2,746	
過去勤務費用の発生額	—		2,300	
退職給付債務の期末残高	44,233		46,052	

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度		当連結会計年度	
	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
年金資産の期首残高	25,800		28,028	
期待運用収益	516		560	
数理計算上の差異の発生額	241		655	
事業主からの拠出額	4,454		4,508	
退職給付の支払額	△3,033		△2,349	
その他	49		52	
年金資産の期末残高	28,028		31,454	

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度		当連結会計年度	
	(平成29年3月31日)		(平成30年3月31日)	
積立型制度の退職給付債務	36,846		36,590	
年金資産	△28,028		△31,454	
	8,817		5,135	
非積立型制度の退職給付債務	7,387		9,461	
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	16,204		14,597	
退職給付に係る負債	16,204		14,597	
退職給付に係る資産	—		—	
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	16,204		14,597	

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

(百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
勤務費用	1,795	1,803
利息費用	273	309
期待運用収益	△516	△560
数理計算上の差異の費用処理額	1,702	127
過去勤務費用の費用処理額	△454	△287
その他	41	86
確定給付制度に係る退職給付費用	2,842	1,479

(注) 勤務費用から確定給付企業年金制度に対する従業員拠出額を前連結会計年度49百万円、当連結会計年度52百万円控除している。

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりである。

(百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
過去勤務費用	△454	△2,588
数理計算上の差異	1,858	682
合計	1,404	△1,905

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりである。

(百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
未認識過去勤務費用	5,192	7,780
未認識数理計算上の差異	4,057	3,374
合計	9,249	11,155

(7) 年金資産に関する事項

①年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
債券	43%	44%
株式	29%	25%
生保一般勘定	9%	8%
その他	19%	23%
合計	100%	100%

②長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮している。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎（加重平均で表している。）

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
割引率	0.7%	0.6%
長期期待運用収益率	2.0%	2.0%

3. 簡便法を適用した確定給付制度

(1) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

(百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	1,284	1,024
退職給付費用	361	354
退職給付の支払額	△117	△188
制度への拠出額	△352	△349
未払金への振替額	△149	—
その他	△1	△46
退職給付に係る負債の期末残高	1,024	794

(2) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

(百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	3,957	4,040
年金資産	△3,143	△3,447
	814	592
非積立型制度の退職給付債務	210	202
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	1,024	794
退職給付に係る負債	1,266	1,148
退職給付に係る資産	△241	△353
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	1,024	794

(3) 退職給付費用

簡便法で計算した退職給付費用 前連結会計年度361百万円 当連結会計年度354百万円

4. 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度344百万円、当連結会計年度364百万円である。

5. 複数事業主制度

一部の連結子会社が加入する厚生年金基金については、重要性が乏しいため、要拠出額を退職給付費用として処理している複数事業主制度に係る注記を省略している。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)		当連結会計年度 (平成30年3月31日)	
繰延税金資産				
退職給付に係る負債	5,341	百万円	4,784	百万円
未払賞与金	2,125	百万円	2,241	百万円
固定資産未実現利益	703	百万円	850	百万円
繰越欠損金	932	百万円	638	百万円
未払事業税	375	百万円	416	百万円
未払賞与に係る社会保険料	336	百万円	348	百万円
資産除去債務	278	百万円	314	百万円
土地減損損失	251	百万円	251	百万円
施設利用権評価損	206	百万円	204	百万円
従業員共済会拠出金	156	百万円	186	百万円
固定資産減価償却	159	百万円	146	百万円
貸倒引当金	91	百万円	106	百万円
役員退職慰労金	74	百万円	86	百万円
投資有価証券評価損	153	百万円	78	百万円
投資損失引当金	61	百万円	23	百万円
工事損失引当金	18	百万円	—	百万円
その他	585	百万円	714	百万円
繰延税金資産小計	11,852	百万円	11,391	百万円
評価性引当額	△1,272	百万円	△1,045	百万円
繰延税金資産合計	10,579	百万円	10,346	百万円
繰延税金負債				
その他有価証券評価差額金	△1,290	百万円	△1,864	百万円
固定資産圧縮積立金	△1,269	百万円	△1,249	百万円
特別償却準備金	△824	百万円	△627	百万円
資産除去債務に対応する 除去費用	△165	百万円	△176	百万円
その他	△652	百万円	△739	百万円
繰延税金負債合計	△4,203	百万円	△4,657	百万円
繰延税金資産の純額	6,376	百万円	5,688	百万円

(注) 繰延税金資産負債の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれている。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)		当連結会計年度 (平成30年3月31日)	
流動資産－繰延税金資産	3,415	百万円	3,755	百万円
固定資産－繰延税金資産	3,401	百万円	2,433	百万円
流動負債－その他	△59	百万円	△3	百万円
固定負債－その他	△381	百万円	△496	百万円

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略している。

(企業結合等関係)

重要性が乏しいため、記載を省略している。

(資産除去債務関係)

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

(1) 当該資産除去債務の概要

再生可能エネルギー発電事業における発電所用地の不動産賃貸借契約に伴う原状回復義務等である。

(2) 当該資産除去債務の金額の算定方法

使用見込期間を取得から17年と見積り、割引率は0.612%～1.994%を使用して資産除去債務の金額を計算している。

(3) 当該資産除去債務の総額の増減

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
期首残高	925 百万円	1,028 百万円
有形固定資産の取得に伴う増加額	86 百万円	111 百万円
時の経過による調整額	16 百万円	17 百万円
期末残高	1,028 百万円	1,157 百万円

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものである。

当社グループは、本社において中長期的な事業戦略を立案し、地域に根ざした事業所を中心に、連結グループ各社と協力しながら、設備工事全般の事業活動を展開している。

また、異業種では連結グループ各社が独立した経営単位として、工事に関連する材料並びに機器の販売事業、不動産販売事業、再生可能エネルギー発電事業等の事業活動を展開している。

従って、当社グループは、事業別のセグメントから構成されており、事業活動の内容等、適切な情報を提供するため、経済的特徴やサービス等の要素が概ね類似する複数の事業セグメントを集約し、「設備工事業」を報告セグメントとしている。

「設備工事業」は、主に配電線工事・屋内配線工事・電気通信工事等の電気工事並びに空調和・冷暖房・給排水衛生設備・水処理工事等の空調管工事の設計・施工を行っている。

2. 報告セグメントの変更等に関する事項

当連結会計年度より、株式会社Q-mastを中心に当社グループの資材購買体制を再編・強化したことに伴い、新たな体制による経営管理を充実させる観点から、「その他」の区分に含まれている工事に関連する材料並びに機器の販売事業について、管理手法を見直している。株式会社Q-mastが、当社グループの設備工事に関連する材料並びに機器の販売については、当社グループの設備工事に関連する資材調達活動であることから、「設備工事業」として集約し、当社グループ以外への工事に関連する材料並びに機器の販売については、従来通り「その他」の区分として集約している。

なお、前連結会計年度のセグメント情報については、変更後の管理手法により作成しており、「4. 報告セグメントごとの売上高、利益、資産、負債その他の項目の金額に関する情報」の前連結会計年度に記載している。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一である。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値である。セグメント間の内部収益及び振替高は、市場実勢価格に基づいている。

4. 報告セグメントごとの売上高、利益、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント	その他 (注1)	合計	調整額 (注3)	合計
	設備工事業				
売上高					
外部顧客への売上高	328,915	12,855	341,771	—	341,771
セグメント間の内部 売上高又は振替高	3,582	4,472	8,055	△8,055	—
計	332,498	17,328	349,826	△8,055	341,771
セグメント利益	29,249	1,324	30,573	159	30,732
その他の項目					
減価償却費	3,063	2,544	5,607	△158	5,449
のれんの償却額	314	2	317	—	317

(注) 1 「その他」の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、工事に関連する材料並びに機器の
販売事業、不動産販売事業、再生可能エネルギー発電事業、人材派遣事業、ソフト開発事業、環境分析・測定
事業、医療関連事業、ゴルフ場経営、ビジネスホテル経営、商業施設の企画・運営等を含んでいる。

2 事業セグメントに資産及び負債を配分していないため、セグメント資産及びセグメント負債の記載は行っ
ていない。

3 セグメント利益の調整額159百万円は、セグメント間取引消去である。

4 セグメント利益は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っている。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント	その他 (注1)	合計	調整額 (注3)	合計
	設備工事業				
売上高					
外部顧客への売上高	346,403	14,468	360,872	—	360,872
セグメント間の内部 売上高又は振替高	2,567	4,938	7,506	△7,506	—
計	348,970	19,407	368,378	△7,506	360,872
セグメント利益	33,273	1,735	35,008	△281	34,726
その他の項目					
減価償却費	3,211	2,446	5,658	△145	5,512
のれんの償却額	148	—	148	—	148

(注) 1 「その他」の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、工事に関連する材料並びに機器の
販売事業、不動産販売事業、再生可能エネルギー発電事業、人材派遣事業、ソフト開発事業、環境分析・測定
事業、医療関連事業、ゴルフ場経営、ビジネスホテル経営、商業施設の企画・運営等を含んでいる。

2 事業セグメントに資産及び負債を配分していないため、セグメント資産及びセグメント負債の記載は行っ
ていない。

3 セグメント利益の調整額△281百万円は、セグメント間取引消去である。

4 セグメント利益は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っている。

5 「設備工事業」セグメントにおいて、のれんの減損損失831百万円を計上している。

【関連情報】

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略している。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高に分類した額が、連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略している。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の額が、連結貸借対照表の有形固定資産の90%を超えるため、記載を省略している。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
九州電力㈱	52,505	設備工事業、その他

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略している。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高に分類した額が、連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略している。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の額が、連結貸借対照表の有形固定資産の90%を超えるため、記載を省略している。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
九州電力㈱	51,910	設備工事業、その他

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

該当事項はない。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略している。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント	その他	全社・消去	合計
	設備工事業			
当期末残高	1,175	—	—	1,175

（注）のれんの償却額に関しては、セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略している。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント	その他 （注）2	全社・消去	合計
	設備工事業			
当期末残高	298	201	—	500

（注）1 のれんの償却額に関しては、セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略している。

2 「その他」の金額は、ソフト開発事業に係るものである。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

該当事項はない。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

設備工事業において、183百万円の負ののれん発生益を計上している。

その主なものとして、平成30年3月19日にエルゴテック(株)の株式の一部を取得し、その子会社の清和工業(株)とともに連結子会社としている。これに伴い当連結会計年度において、182百万円の負ののれん発生益を計上している。

【関連当事者情報】

1 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者の取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主(会社等の場合に限る。)等

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
その他の 関係会社	九州電力㈱	福岡市 中央区	237,304	電気事業	直接 22.82 間接 0.17	建設工事の請負施工 役員の兼任2名	工事請負施工	48,652	完成工事 未収入金	9,317
									未成工事 受入金	62

(注) 1 記載金額のうち、取引金額には消費税等が含まれておらず、期末残高には消費税等が含まれている。

2 議決権等の被所有割合の間接所有は、㈱電気ビル(0.08%)、光洋電器工業㈱(0.07%)、及び西日本プラ
ント工業㈱(0.02%)である。

3 取引条件及び取引条件の決定方針等

工事の受注については、市場価格等を勘案し、価格交渉のうえ、一般的取引条件と同様に決定している。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
その他の 関係会社	九州電力㈱	福岡市 中央区	237,304	電気事業	直接 22.49 間接 0.17	建設工事の請負施工 役員の兼任2名	工事請負施工	47,881	完成工事 未収入金	8,435
									未成工事 受入金	92

(注) 1 記載金額のうち、取引金額には消費税等が含まれておらず、期末残高には消費税等が含まれている。

2 議決権等の被所有割合の間接所有は、㈱電気ビル(0.07%)、光洋電器工業㈱(0.07%)、及び西日本プラ
ント工業㈱(0.02%)である。

3 取引条件及び取引条件の決定方針等

工事の受注については、市場価格等を勘案し、価格交渉のうえ、一般的取引条件と同様に決定している。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり純資産額	1,995.00円	2,269.48円
1株当たり当期純利益金額	327.22円	356.89円
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額	313.47円	355.55円

(注) 1 1株当たり当期純利益金額及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりである。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり当期純利益金額		
親会社株主に帰属する当期純利益(百万円)	22,297	25,296
普通株主に帰属しない金額(百万円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益(百万円)	22,297	25,296
普通株式の期中平均株式数(千株)	68,143	70,878
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額		
親会社株主に帰属する当期純利益調整額(百万円)	—	—
普通株式増加数(千株)	2,989	267
(うち転換社債型新株予約権付社債(千株))	(2,989)	(267)
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり 当期純利益金額の算定に含めなかった潜在株式の概要	—	

2 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりである。

	前連結会計年度末 (平成29年3月31日)	当連結会計年度末 (平成30年3月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	141,503	164,139
純資産の部の合計額から控除する金額(百万円)	1,622	2,689
(うち新株予約権(百万円))	(—)	(—)
(うち非支配株主持分(百万円))	(1,622)	(2,689)
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	139,881	161,449
普通株式の発行済株式数(千株)	70,134	71,158
普通株式の自己株式数(千株)	18	18
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式 の数(千株)	70,116	71,139

(重要な後発事象)

該当事項なし。

⑤ 【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率 (%)	担保	償還期限
(株)九電工	第2回無担保 転換社債型新株予約 権付社債(注)1・2	平成27年 3月16日	1,860	13 (13)	—	無担保社債	平成31年 3月15日
合計	—	—	1,860	13 (13)	—	—	—

(注) 1 「当期末残高」欄の(内訳)は、1年内償還予定の金額である。

2 転換社債型新株予約権付社債の内容

発行すべき 株式の内容	新株予約 権の発行 価額	株式の 発行価格 (円)	発行価額の 総額 (百万円)	新株予約権の行使 により発行した 株式の発行価額 の総額(百万円)	新株予約権 の付与割合 (%)	新株予約権 の行使期間	代用払込みに 関する事項
(株)九電工 普通株式	無償	1,801.50	10,000	1,844	100	自 平成27年 4月1日 至 平成31年 3月13日	(注)

(注) 新株予約権の行使に際して出資される財産の内容は、当該新株予約権に係る本社債を出資するものとする。

3 連結決算日後5年内における1年ごとの償還予定額の総額

1年以内 (百万円)	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
13	—	—	—	—

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	14,839	400	0.83	—
1年以内に返済予定の長期借入金	6,548	7,184	0.71	—
1年以内に返済予定のリース債務	849	899	8.32	—
長期借入金(1年以内に返済予定 のものを除く。)	9,707	8,983	0.75	平成31年度～ 平成42年度
リース債務(1年以内に返済予定 のものを除く。)	2,322	2,597	8.52	平成31年度～ 平成38年度
その他有利子負債	—	—	—	—
合計	34,268	20,065	—	—

(注) 1 「平均利率」については、借入金の期末残高に対する期末の利率による加重平均利率を記載している。

2 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年内における返済予定額は以下のとおりである。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	686	611	591	5,591
リース債務	795	730	582	360

【資産除去債務明細表】

明細表に記載すべき事項が連結財務諸表規則第15条の23に規定する注記事項として記載しているため、記載を省略している。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第 1 四半期	第 2 四半期	第 3 四半期	当連結会計年度
売上高 (百万円)	65,649	159,378	230,277	360,872
税金等調整前四半期 (当期) 純利益金額 (百万円)	5,006	14,749	20,592	37,148
親会社株主に帰属 する四半期 (当期) 純利益金額 (百万円)	3,346	9,677	13,597	25,296
1 株当たり四半期 (当期) 純利益金額 (円)	47.48	136.91	192.05	356.89

(会計期間)	第 1 四半期	第 2 四半期	第 3 四半期	第 4 四半期
1 株当たり 四半期純利益金額 (円)	47.48	89.26	55.17	164.45

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年 3 月31 日)	当事業年度 (平成30年 3 月31 日)
資産の部		
流動資産		
現金預金	22,944	27,581
受取手形	※1 7,596	※1 6,659
電子記録債権	13,526	14,044
完成工事未収入金	※1 75,177	※1 90,478
ファクタリング債権	6,099	3,048
有価証券	1	-
未成工事支出金	5,774	4,069
材料貯蔵品	3,953	5,287
前払費用	406	376
繰延税金資産	2,411	2,497
短期貸付金	※1, ※3 3,346	※1, ※3 3,060
その他	4,732	1,843
流動資産合計	145,971	158,948
固定資産		
有形固定資産		
建物	51,122	51,255
減価償却累計額	△25,713	△26,213
建物（純額）	25,409	25,041
構築物	4,092	4,118
減価償却累計額	△3,182	△3,234
構築物（純額）	910	884
機械及び装置	7,494	7,684
減価償却累計額	△3,574	△3,933
機械及び装置（純額）	3,920	3,750
車両運搬具	111	111
減価償却累計額	△101	△105
車両運搬具（純額）	10	5
工具器具・備品	5,489	5,406
減価償却累計額	△4,677	△4,578
工具器具・備品（純額）	812	827
土地	23,447	23,377
リース資産	5,031	5,260
減価償却累計額	△2,824	△2,861
リース資産（純額）	2,207	2,399
建設仮勘定	957	231
有形固定資産合計	57,673	56,517
無形固定資産		
ソフトウェア	728	525
電話加入権	93	93
その他	45	147
無形固定資産合計	867	766

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年 3月31日)	当事業年度 (平成30年 3月31日)
投資その他の資産		
投資有価証券	※3 35,612	※3 35,985
関係会社株式	※3 14,417	※3 17,280
出資金	18	18
関係会社出資金	316	281
長期貸付金	※3 210	177
関係会社長期貸付金	※3 16,922	※3 19,212
破産更生債権等	138	133
長期前払費用	207	200
その他	3,214	3,267
貸倒引当金	△769	△904
投資その他の資産	70,288	75,653
固定資産合計	128,829	132,937
資産合計	274,800	291,886
負債の部		
流動負債		
支払手形	※1 7,819	※1 8,080
電子記録債務	11,217	12,729
工事未払金	※1 51,946	※1 61,970
短期借入金	20,911	5,661
キャッシュ・マネジメント・サービス借入金	※2 18,075	※2 21,574
リース債務	700	724
未払金	610	2,735
未払費用	1,740	1,769
未払法人税等	5,169	5,085
未成工事受入金	8,830	5,762
預り金	1,530	2,478
前受収益	6	6
営業外支払手形	395	81
工事損失引当金	59	-
その他	8	653
流動負債合計	129,024	129,313
固定負債		
転換社債型新株予約権付社債	1,860	-
長期借入金	7,716	7,055
リース債務	1,893	2,111
長期末払金	126	134
退職給付引当金	7,020	3,507
資産除去債務	145	148
繰延税金負債	678	2,126
その他	246	347
固定負債合計	19,686	15,429
負債合計	148,710	144,743

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年 3 月31 日)	当事業年度 (平成30年 3 月31 日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	11,632	12,555
資本剰余金		
資本準備金	11,615	12,537
その他資本剰余金	72	68
資本剰余金合計	11,687	12,605
利益剰余金		
その他利益剰余金		
圧縮記帳積立金	2,716	2,673
特別償却準備金	1,628	1,265
別途積立金	58,519	58,519
繰越利益剰余金	36,959	55,582
利益剰余金合計	99,824	118,040
自己株式	△0	△1
株主資本合計	123,144	143,200
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	3,001	4,171
繰延ヘッジ損益	△56	△228
評価・換算差額等合計	2,945	3,942
純資産合計	126,089	147,142
負債純資産合計	274,800	291,886

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)	当事業年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)
売上高		
完成工事高	※ 1、※ 2 308,523	※ 1、※ 2 324,823
兼業事業売上高	※ 2 1,273	※ 2 1,315
売上高合計	309,796	326,138
売上原価		
完成工事原価	※ 2 265,039	※ 2 278,590
兼業事業売上原価	※ 2 978	※ 2 907
売上原価合計	266,018	279,498
売上総利益		
完成工事総利益	43,483	46,232
兼業事業総利益	294	407
売上総利益合計	43,778	46,640
販売費及び一般管理費		
役員報酬	347	360
執行役員報酬	548	608
従業員給料手当	6,769	6,755
退職給付費用	537	284
法定福利費	1,076	1,085
福利厚生費	536	495
修繕維持費	138	142
事務用品費	183	230
通信交通費	667	669
動力用水光熱費	125	145
調査研究費	491	560
広告宣伝費	242	252
貸倒引当金繰入額	△0	△0
交際費	511	516
寄付金	80	86
地代家賃	755	803
減価償却費	715	757
租税公課	1,224	1,238
保険料	15	12
雑費	1,249	1,188
販売費及び一般管理費合計	16,215	16,195
営業利益	27,562	30,445

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)	当事業年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)
営業外収益		
受取利息	※ 2 246	※ 2 241
有価証券利息	35	44
受取配当金	※ 2 865	※ 2 1,456
為替差益	-	14
投資事業組合運用益	195	650
受取賃貸料	※ 2 360	※ 2 360
受取保険金及び配当金	324	451
その他	555	518
営業外収益合計	2,583	3,738
営業外費用		
支払利息	※ 2 356	※ 2 382
為替差損	58	-
割増退職金	41	86
関係会社貸倒引当金繰入額	-	151
その他	66	44
営業外費用合計	522	665
経常利益	29,623	33,518
特別利益		
固定資産売却益	※ 3 44	※ 3 495
投資有価証券売却益	27	227
関係会社清算益	-	0
特別利益合計	72	723
特別損失		
固定資産処分損	※ 4 118	※ 4 310
投資有価証券評価損	9	7
関係会社株式評価損	86	42
施設利用権評価損	-	1
特別損失合計	214	362
税引前当期純利益	29,481	33,878
法人税、住民税及び事業税	8,223	9,111
法人税等調整額	442	905
法人税等合計	8,665	10,017
当期純利益	20,815	23,861

【完成工事原価報告書】

		前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
区分	注記番号	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
材料費		73,496	27.7	83,074	29.8
労務費		12,829	4.9	12,597	4.5
(うち労務外注費)		(—)	(—)	(—)	(—)
外注費		120,113	45.3	120,809	43.4
経費		58,600	22.1	62,109	22.3
(うち人件費)		(30,410)	(11.5)	(31,733)	(11.4)
計		265,039	100	278,590	100

(注)原価計算の方法

当社の原価計算は、個別原価計算の方法により工事ごとに原価を材料費・労務費・外注費及び経費の要素別に分類集計している。経費のうち工事別に把握の困難なものは、工事共通経費として一括集計し、期末において完成工事原価と未成工事支出金とに配賦している。材料費・労務費・経費の全部又は一部について、各工事に予定配賦を行い、実際原価との間に生ずる原価差額は期末において完成工事原価と未成工事支出金とに一括配賦している。

【兼業事業売上原価報告書】

(イ) 器具販売原価

		前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
区分	注記番号	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
材料費		126	100	152	100
計		126	100	152	100

(ロ) インターネット原価

		前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
区分	注記番号	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
経費		38	100	35	100
計		38	100	35	100

(ハ) エコ事業原価

		前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
区分	注記番号	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
商品原価		56	100	39	100
計		56	100	39	100

(ニ) 施設運営事業原価

		前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
区分	注記番号	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
経費		119	100	115	100
計		119	100	115	100

(ホ) 発電事業原価

		前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
区分	注記番号	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
経費		637	100	564	100
計		637	100	564	100

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本						
	資本金	資本剰余金		利益剰余金			
		資本準備金	その他 資本剰余金	その他利益剰余金			
				圧縮記帳積立金	特別償却準備金	別途積立金	繰越利益剰余金
当期首残高	7,901	7,889	0	2,753	1,991	58,519	19,486
当期変動額							
新株の発行	3,730	3,726					
剰余金の配当							△3,742
圧縮記帳積立金の取崩				△36			36
特別償却準備金の取崩					△362		362
当期純利益							20,815
自己株式の取得							
自己株式の処分			71				
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）							
当期変動額合計	3,730	3,726	71	△36	△362	—	17,472
当期末残高	11,632	11,615	72	2,716	1,628	58,519	36,959

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	
当期首残高	△604	97,938	2,094	△87	99,946
当期変動額					
新株の発行		7,457			7,457
剰余金の配当		△3,742			△3,742
圧縮記帳積立金の取崩		—			—
特別償却準備金の取崩		—			—
当期純利益		20,815			20,815
自己株式の取得	△4	△4			△4
自己株式の処分	608	680			680
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）			906	31	937
当期変動額合計	603	25,205	906	31	26,143
当期末残高	△0	123,144	3,001	△56	126,089

当事業年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本						
	資本金	資本剰余金		利益剰余金			
		資本準備金	その他 資本剰余金	その他利益剰余金			
				圧縮記帳積立金	特別償却準備金	別途積立金	繰越利益剰余金
当期首残高	11,632	11,615	72	2,716	1,628	58,519	36,959
当期変動額							
新株の発行	922	921					
剰余金の配当							△5,645
圧縮記帳積立金の取崩				△43			43
特別償却準備金の取崩					△362		362
当期純利益							23,861
自己株式の取得							
自己株式の処分			△4				
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）							
当期変動額合計	922	921	△4	△43	△362	—	18,622
当期末残高	12,555	12,537	68	2,673	1,265	58,519	55,582

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	
当期首残高	△0	123,144	3,001	△56	126,089
当期変動額					
新株の発行		1,844			1,844
剰余金の配当		△5,645			△5,645
圧縮記帳積立金の取崩		—			—
特別償却準備金の取崩		—			—
当期純利益		23,861			23,861
自己株式の取得	△7	△7			△7
自己株式の処分	7	3			3
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）			1,169	△172	996
当期変動額合計	△0	20,056	1,169	△172	21,052
当期末残高	△1	143,200	4,171	△228	147,142

【注記事項】

(重要な会計方針)

1 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 子会社株式及び関連会社株式並びに関係会社出資金

移動平均法による原価法

なお、投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資（金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるもの）については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書を基礎とし、持分相当額を純額で取り込む方法によっている。

(2) その他有価証券

時価のあるもの

決算期末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

時価のないもの

移動平均法による原価法

なお、投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資（金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるもの）については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書を基礎とし、持分相当額を純額で取り込む方法によっている。

2 たな卸資産の評価基準及び評価方法

(1) 未成工事支出金

個別法による原価法

(2) 材料貯蔵品

総平均法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）

3 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）

建物（建物附属設備を含む）については定額法、建物以外については定率法によっている。

ただし、平成28年4月1日以降に取得した構築物については定額法を採用している。

なお、耐用年数及び残存価額については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっている。

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）

定額法によっている。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法を採用している。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっている。

(4) 長期前払費用

定額法によっている。

4 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

売上債権、貸付金等の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上している。

(2) 投資損失引当金

投資に対する損失への対応を図るため、財務健全性の観点から、必要額を計上している。

なお、投資損失引当金は、当該資産の金額から直接控除している。

(3) 工事損失引当金

受注工事の損失発生に備えるため、当事業年度末手持工事のうち、損失の発生が見込まれ、かつ金額を合理的に見積もることのできる工事について、その損失見込額を計上している。

なお、当事業年度末においては、損失の発生が見込まれる工事契約がないため、工事損失引当金は計上していない。

(4) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上している。

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっている。

② 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用については、その発生時における従業員の平均残存勤務期間の年数による定額法により按分した額を発生時から費用処理している。

数理計算上の差異については、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間の年数による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌事業年度から費用処理している。

5 完成工事高及び完成工事原価の計上基準

完成工事高の計上は、当事業年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事については工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を適用し、その他の工事については工事完成基準を適用している。

6 ヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理による。なお、金利通貨スワップについては一体処理（特例処理、振当処理）、為替予約については振当処理を採用している。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

a. ヘッジ手段・・・金利通貨スワップ

ヘッジ対象・・・外貨建借入金及び外貨建借入金利息

b. ヘッジ手段・・・為替予約

ヘッジ対象・・・外貨建予定取引

(3) ヘッジ方針

当社は、外貨建取引の為替相場の変動リスクを回避する目的で為替予約取引を行い、金融機関からの外貨建借入金のすべてについて、為替及び金利変動によるリスクを回避するため、金利通貨スワップを利用している。なお、投機目的のデリバティブ取引は行わない方針である。

(4) ヘッジ有効性評価の方法

当社は、ヘッジ手段とヘッジ対象に関する重要な条件が一致している場合は、ヘッジ有効性の判定を省略している。また、金利通貨スワップについては一体処理の要件を満たしているため、為替予約については将来の取引予定に基づくものであり、実行の可能性が極めて高いため、有効性の判定を省略している。

7 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異、未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっている。

(2) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税に相当する額の会計処理は、税抜方式によっており、資産に係る控除対象外消費税及び地方消費税は当事業年度の費用として処理している。

(貸借対照表関係)

※1 このうち、関係会社に対するものは、次のとおりである。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
受取手形及び完成工事未収入金	18,073百万円	11,908百万円
短期貸付金	3,341百万円	2,703百万円
支払手形及び工事未払金	11,231百万円	27,721百万円

※2 連結子会社を対象にしたキャッシュ・マネジメント・サービスによる借入金である。

※3 当社が出資しているPFI事業及び再生可能エネルギー発電事業に関する事業会社の借入債務に対して、担保を提供しており、担保に供している資産は次のとおりである。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
短期貸付金	1,309百万円	15百万円
投資有価証券	4,330百万円	4,715百万円
関係会社株式	3,798百万円	3,918百万円
長期貸付金	2百万円	一百万円
関係会社長期貸付金	90百万円	77百万円
計	9,530百万円	8,727百万円

4 偶発債務

次のとおり、債務の保証を行っている。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
(1) ㈱みずほ銀行他1行 九連環境開発股份有限公司 ボンド発行保証・ 借入保証	72百万円	30百万円
(2) ㈱みずほ銀行 渥美グリーンパワー㈱ 借入保証	465百万円	378百万円
(3) ㈱日本政策投資銀行 長島ウインドヒル㈱ 借入保証	245百万円	217百万円
(3) ㈱北陸銀行 他3行 松島風力㈱ 借入保証	一百万円	880百万円
計	783百万円	1,506百万円

5 (当社貸手側)

当社は、グループ全体の効率的資金運用・調達を行うため、キャッシュ・マネジメント・サービスを導入しており、前事業年度はグループ会社37社、当事業年度はグループ会社38社と資金の集中・配分等のサービスに関する基本契約書を締結し、キャッシュ・マネジメント・サービスによる貸出限度額を設定している。

当事業年度末における貸出コミットメントに係る貸出未実行残高は次のとおりである。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
貸出コミットメントの総額	11,950百万円	12,100百万円
貸出実行残高	166百万円	219百万円
差引額	11,783百万円	11,880百万円

当社は、PFI事業会社への協調融資における劣後貸出人として劣後貸付契約を締結している。

前事業年度における対象会社数は9社であり、当事業年度における対象会社数は10社である。

当事業年度末における貸出コミットメントに係る貸出未実行残高は次のとおりである。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
貸出コミットメントの総額	146百万円	155百万円
貸出実行残高	一百万円	一百万円
差引額	146百万円	155百万円

(損益計算書関係)

※1 工事進行基準による完成工事高は、次のとおりである。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
	160,566百万円	176,796百万円

※2 関係会社との取引にかかるものが、次のとおり含まれている。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
完成工事高及び兼業事業売上高	64,218百万円	59,817百万円
完成工事原価及び兼業事業売上原価	50,440百万円	96,284百万円
受取利息	239百万円	230百万円
受取配当金	85百万円	961百万円
受取賃貸料	172百万円	197百万円
支払利息	22百万円	27百万円

※3 固定資産売却益の内訳は、次のとおりである。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
建物	0百万円	一百万円
機械及び装置	一百万円	0百万円
工具器具・備品	一百万円	0百万円
土地	44百万円	495百万円
計	44百万円	495百万円

※4 固定資産処分損の内訳は、次のとおりである。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
建物	100百万円	290百万円
構築物	1百万円	3百万円
機械及び装置	4百万円	0百万円
工具器具・備品	2百万円	0百万円
土地	一百万円	10百万円
リース資産	2百万円	1百万円
ソフトウェア	1百万円	一百万円
無形固定資産その他	一百万円	0百万円
投資その他の資産その他	5百万円	3百万円
計	118百万円	310百万円

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
子会社株式	9,286百万円	10,716百万円
関連会社株式	3,997百万円	5,351百万円
計	13,283百万円	16,068百万円

上記については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められるものである。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成29年 3月31日)	当事業年度 (平成30年 3月31日)
繰延税金資産		
未払賞与金	1,580 百万円	1,636 百万円
退職給付引当金	2,149 百万円	1,068 百万円
投資有価証券評価損	330 百万円	336 百万円
未払事業税	296 百万円	323 百万円
未払賞与に係る社会保険料	246 百万円	256 百万円
土地減損損失	215 百万円	215 百万円
従業員共済会拠出金	156 百万円	186 百万円
施設利用権評価損	184 百万円	180 百万円
減価償却費	157 百万円	143 百万円
投資損失引当金	61 百万円	23 百万円
工事損失引当金	18 百万円	— 百万円
その他	276 百万円	332 百万円
繰延税金資産小計	5,672 百万円	4,704 百万円
評価性引当額	△756 百万円	△805 百万円
繰延税金資産合計	4,916 百万円	3,898 百万円
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△1,240 百万円	△1,772 百万円
固定資産圧縮積立金	△1,190 百万円	△1,170 百万円
特別償却準備金	△715 百万円	△554 百万円
その他	△37 百万円	△30 百万円
繰延税金負債合計	△3,183 百万円	△3,527 百万円
繰延税金資産の純額	1,733 百万円	370 百万円

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

前事業年度及び当事業年度はともに、法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略している。

(重要な後発事象)

該当事項なし。

④ 【附属明細表】

【有価証券明細表】

【株式】

銘柄		株式数(株)	貸借対照表 計上額(百万円)	
投資 有価証券	その他 有価証券	九州旅客鉄道(株)	985,000	3,260
		(株)ふくおかフィナンシャルグループ	3,225,138	1,848
		(株)西日本フィナンシャルホールディングス	1,334,076	1,646
		(株)正興電機製作所	1,619,368	1,527
		住友不動産(株)	331,000	1,302
		大和ハウス工業(株)	300,000	1,230
		西日本鉄道(株)	400,000	1,112
		福岡エアポートホールディングス(株)	181,800	1,025
		松竹(株)	64,000	965
		(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	1,059,710	738
		西部瓦斯(株)	166,800	459
		日本空港ビルデング(株)	100,000	406
		(株)西武ホールディングス	163,500	302
		(株)筑邦銀行	134,713	293
		松井建設(株)	330,000	262
		戸田建設(株)	339,518	261
		(株)RKB毎日ホールディングス	35,168	225
		(株)にしけい	271,000	224
		鹿児島メガソーラー発電(株)	2,225	222
		博多港開発(株)	416,000	208
		福岡地下街開発(株)	403,000	201
		サッポロホールディングス(株)	60,000	186
		ローム(株)	17,300	175
		(株)三越伊勢丹ホールディングス	144,195	169
		(株)三井住友フィナンシャルグループ	36,183	161
		ハウステンボス(株)	3,000	150
		(株)福岡ソフトリサーチパーク	2,900	145
		イオン(株)	75,647	143
		久光製薬(株)	17,000	140
		九州重粒子線施設管理(株)	1,300	130
		その他(133銘柄)	2,607,634	2,318
		小計	14,827,175.00	21,443
計		14,827,175.00	21,443	

【債券】

銘柄			券面総額 (百万円)	貸借対照表 計上額(百万円)
投資 有価証券	その他 有価証券	ユーロ円建クレジットリンク債	1,000	991
		ユーロ円建クレジットリンク債	1,000	965
		クレディアグリコルエスエー 第5回期限前償還条項付円貨社債(劣後)	623	618
		ソシエテジェネラル 第5回期限前償還条項付円貨社債(劣後)	207	206
		その他(4銘柄)	293	242
		小計	3,124	3,023
		計	3,124	3,023

【その他】

種類及び銘柄			投資口数等 (百万口)	貸借対照表 計上額(百万円)
投資 有価証券	その他 有価証券	(投資事業有限責任組合及び それに類する組合への出資)		
		合同会社レナトス相馬ソーラーパーク匿名組合	—	1,546
		合同会社ソーラーファーム南さつま匿名組合	—	1,289
		Kクリーンエナジー奈良㈱匿名組合	—	1,058
		英田光メガソーラー発電合同会社匿名組合	—	796
		Kクリーンエナジー㈱匿名組合	—	657
		合同会社ソーラーパーク高岡匿名組合	—	565
		スマートエネルギー投資合同会社匿名組合	—	550
		合同会社セントパインメガソーラーパーク匿名組合	—	517
		㈱九州エターナルエナジー匿名組合	—	515
		七尾メガソーラー合同会社匿名組合	—	501
		合同会社ガルザ・ソーラー匿名組合	—	348
		合同会社ソーラーファーム松橋匿名組合	—	320
		㈱水俣エターナルエナジー匿名組合	—	288
		Kクリーンエナジー奈良・ツウ㈱匿名組合	—	284
		㈱武雄メガソーラーパーク匿名組合	—	239
		ナイン・ステーツ・4投資事業有限責任組合	—	209
		㈱生駒エターナルエナジー匿名組合	—	173
		合同会社コールマイン飯塚ソーラーパーク匿名組合	—	172
		㈱鹿児島エターナルエナジー匿名組合	—	127
		その他(7銘柄)	—	221
		小計	—	10,384
		七ツ島バイオマスパワー合同会社	—	595
		豊前ニューエナジー合同会社	—	385
		鹿屋大崎ソーラーヒルズ合同会社	—	150
		その他(2銘柄)	—	3
		小計	—	1,134
		計	—	11,519

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価 却累計額 又は償却 累計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差引当期末 残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	51,122	1,021	888	51,255	26,213	1,203	25,041
構築物	4,092	89	63	4,118	3,234	113	884
機械及び装置	7,494	358	169	7,684	3,933	527	3,750
車両運搬具	111	1	1	111	105	5	5
工具器具・備品	5,489	393	476	5,406	4,578	375	827
土地	23,447	62	132	23,377	—	—	23,377
リース資産	5,031	932	703	5,260	2,861	739	2,399
建設仮勘定	957	898	1,624	231	—	—	231
有形固定資産計	97,748	3,758	4,060	97,445	40,927	2,965	56,517
無形固定資産							
ソフトウェア	1,491	92	—	1,583	1,057	294	525
電話加入権	93	—	0	93	—	—	93
その他	47	174	73	148	1	0	147
無形固定資産計	1,632	267	73	1,825	1,059	295	766
長期前払費用	168	16	0	184	48	15	135
繰延資産							
—	—	—	—	—	—	—	—
繰延資産計	—	—	—	—	—	—	—

(注) 1 当期増加額のうち、主なものは次のとおりである。

建物・構築物 下山門寮新築 421百万円

2 ソフトウェアの当期首残高については、前期末迄償却済の残高を233百万円除いている。

3 長期前払費用については、法人税法の償却対象分のみを記載しているため、保険料等の期間配分にかかるものは除いている。

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	769	152	12	4	904
工事損失引当金	59	—	29	30	—

(注) 1 貸倒引当金の「当期減少額(その他)」は、債権回収額等及び必要額の減少による戻入額である。

2 工事損失引当金の「当期減少額(その他)」は、工事損益の改善による戻入額である。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略している。

(3) 【その他】

該当事項なし。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り 取扱場所 株主名簿管理人 取次所 買取手数料	東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社証券代行部 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社 — 「買取価格の決定」に定める買取価格によって、次に定める料率により1単元当たりの株式数の売買の委託に係る手数料相当額を算定し、これを買取った単元未満株式の数で按分した額とする。 (手数料率) ・100万円以下の金額につき1.150% ただし、その金額が2,500円に満たない場合には、2,500円とする。 ・100万円を超え500万円以下の金額につき0.900% (円未満の端数を生じた場合には切り捨てる。)
公告掲載方法	当会社の公告方法は、電子公告とする。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。 なお、電子公告は当会社のホームページに掲載しており、そのアドレスは次のとおりである。 http://www.kyudenko.co.jp
株主に対する特典	なし

- (注) 当会社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない。
- 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
 - 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
 - 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利

第 7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社には、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度 第89期(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)平成29年6月29日関東財務局長に提出。

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

平成29年6月29日関東財務局長に提出。

(3) 四半期報告書及び確認書

第90期第1四半期(自 平成29年4月1日 至 平成29年6月30日)平成29年8月9日関東財務局長に提出。

第90期第2四半期(自 平成29年7月1日 至 平成29年9月30日)平成29年11月10日関東財務局長に提出。

第90期第3四半期(自 平成29年10月1日 至 平成29年12月31日)平成30年2月9日関東財務局長に提出。

(4) 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)の規定に基づく
臨時報告書

平成29年6月30日関東財務局長に提出。

平成30年6月29日関東財務局長に提出。

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項なし。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成30年6月26日

株式会社九電工
取締役会 御中

新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	東	能	利	生	Ⓔ
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	宮	本	義	三	Ⓔ

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社九電工の平成29年4月1日から平成30年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社九電工及び連結子会社の平成30年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社九電工の平成30年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、株式会社九電工が平成30年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

※1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は有価証券報告書提出会社が別途保管している。

2 XBRLデータは監査の対象には含まれていない。

独立監査人の監査報告書

平成30年6月26日

株式会社九電工
取締役会 御中

新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 東 能 利 生 ㊞

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 宮 本 義 三 ㊞

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社九電工の平成29年4月1日から平成30年3月31日までの第90期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社九電工の平成30年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- ※1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は有価証券報告書提出会社が別途保管している。
- 2 XBRLデータは監査の対象には含まれていない。

【表紙】

【提出書類】 内部統制報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の4第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 平成30年6月29日

【会社名】 株式会社九電工

【英訳名】 KYUDENKO CORPORATION

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 西 村 松 次

【最高財務責任者の役職氏名】 該当なし

【本店の所在の場所】 福岡県福岡市南区那の川一丁目23番35号

【縦覧に供する場所】 株式会社九電工東京本社

(東京都豊島区東池袋三丁目1番1号(サンシャイン60))

株式会社九電工関西支店

(大阪市中央区南船場二丁目9番8号(シマノ・住友生命ビル))

株式会社東京証券取引所

(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

証券会員制法人福岡証券取引所

(福岡市中央区天神二丁目14番2号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役社長西村松次は、当社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について(意見書)」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用している。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものである。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である平成30年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠した。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制(全社的な内部統制)の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定している。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行った。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社並びに連結子会社及び持分法適用関連会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定した。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、当社及び連結子会社24社と持分法適用関連会社1社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定した。なお、連結子会社24社及び持分法適用関連会社6社については、金額的及び質的重要性の観点から僅少であると判断し、全社的な内部統制の評価範囲に含めていない。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、当社の前連結会計年度の売上高(連結会社間取引消去後)が、前連結会計年度の連結売上高の概ね2/3に達していることから、「重要な事業拠点」を当社とした。

選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として完成工事高、完成工事未収入金及び未成工事支出金に至る業務プロセスを評価の対象とした。さらに、選定した重要な事業拠点にかかわらず、それ以外の事業拠点も含めた範囲について、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている事業又は業務に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加している。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断した。

4 【付記事項】

該当事項なし。

5 【特記事項】

該当事項なし。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の2第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成30年6月29日
【会社名】	株式会社九電工
【英訳名】	KYUDENKO CORPORATION
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 西 村 松 次
【最高財務責任者の役職氏名】	該当なし
【本店の所在の場所】	福岡県福岡市南区那の川一丁目23番35号
【縦覧に供する場所】	株式会社九電工東京本社 (東京都豊島区東池袋三丁目1番1号(サンシャイン60)) 株式会社九電工関西支店 (大阪市中央区南船場二丁目9番8号(シマノ・住友生命ビル)) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号) 証券会員制法人福岡証券取引所 (福岡市中央区天神二丁目14番2号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長西村松次は、当社の第90期(自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

2 【特記事項】

確認に当たり、特記すべき事項はありません。